

伊能忠敬研究

史料と伊能図

二〇一八年 第八十六号

伊能忠敬研究会

史料と伊能図「伊能忠敬研究」

二〇一八年 第八十六号

九島

THE INOH TADATAKA JOURNAL
STUDIES OF INOH'S MAP AND WRITINGS

No.86 2018



アメリカ力議会議図書館蔵

伊能大図52号部分（松島周辺）

この図は第二次測量時のものである。享和元（1801）年江戸を出立、三浦半島、伊豆半島を測量し江戸に戻った後、再び6月19日江戸を出立、房総半島、銚子を経て太平洋岸を北上し、小名浜、関上浜を経て8月20日蒲生村（仙台市）に着いた。21日は塩釜村、22、23日は松島（塩釜市）を測量している。その後、石巻・宮古・下北半島を廻り津軽半島の三厩迄測量する。

帰路は一次測量の帰路と同じルートで12月7日江戸深川帰着した。

伊能忠敬にとって松島訪問は二次測量が初めてではなかった。

忠敬の測量日記（9月8日）によれば

「余、先年奥州松島を遊覧しけるに、頃は皐月末の八日佐原を出立。鉾田と云所まで乗船す。風波ありて尺取らず。漸々串挽江着て船泊りしける。傍にも旅人乗りし舟ありける。笠鼓しに物語れは、松島より遠き分ケ濱と云所の秋山惣兵衛と云者にて、交易の事に銚子港へ来り。復、某国へ帰りけるなり。彼人云けるは、一人旅の物寂しければ願わくは同伴賜へかし程に、此方も旅馴ぬ身の幸と同動しける。十日程を経て仙台の城下に着けるに、此所の名所など案内し、且、酒食迄も篤く餐応しける、別ニ臨て惣兵衛いいけるは、貴邦は吾郷を去る事百里余の山海を隔てぬれば、おうが難かるへし。余は交易の為に銚子港又ハ東都へ幾度も往来す。その行路なれば必尋ね問んと約して別れぬ。」とある。

この松島測量の2週間後、分浜の止宿が24年前、妻を伴い松島漫遊をした際、10日間も同行した秋山惣兵衛家になるのである。

左図は国土地理院地図に伊能図測線を取り出し、本塩釜駅及び瑞巖寺付近が重なるように合わせた図である。埋め立てられたためか海岸線が伊能図と異なるところが多い。海中引き縄も数か所見られる。西日本測量とは対照的に島は殆ど測量されていない。陸前大塚あたりは東西方向のずれが確認できる。

宮内 敏

（表紙題字は伊能忠敬の筆跡）



目次

86号

表紙解説

伊能忠敬測量経路（第2次の部分）

享和元年（松島周辺）

宮内 敏

特報

立川志の輔師匠

伊能忠敬研究会名誉会員に

渡辺 一郎

研究と話題

●九鬼隆範作成「京神間線路図」について

「伊能忠敬の足跡をたどる」紹介

「町方書上」と『寺社書上』

加賀藩の測量隊受け入れ方針決定まで

●奥地実測録を読む

●伊能忠敬史跡めぐり

資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十回

監修

編著

●奥宮正樹「測量日記」紹介（完結編）

●伊能測量協力者子孫顕彰会の経緯

忠敬談話室

事務局

渡辺 一郎・戸村 茂樹

事務局長

渡辺 一郎・戸村 茂樹

九州支部ニュース

平成30年度支部総会報告

香取市・伊能忠敬翁の銅像を建立

新入会員自己紹介

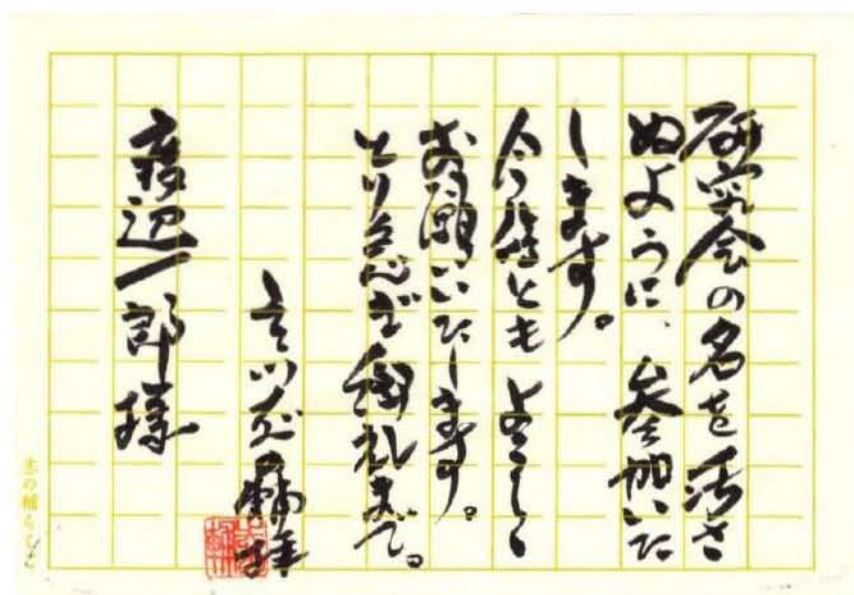
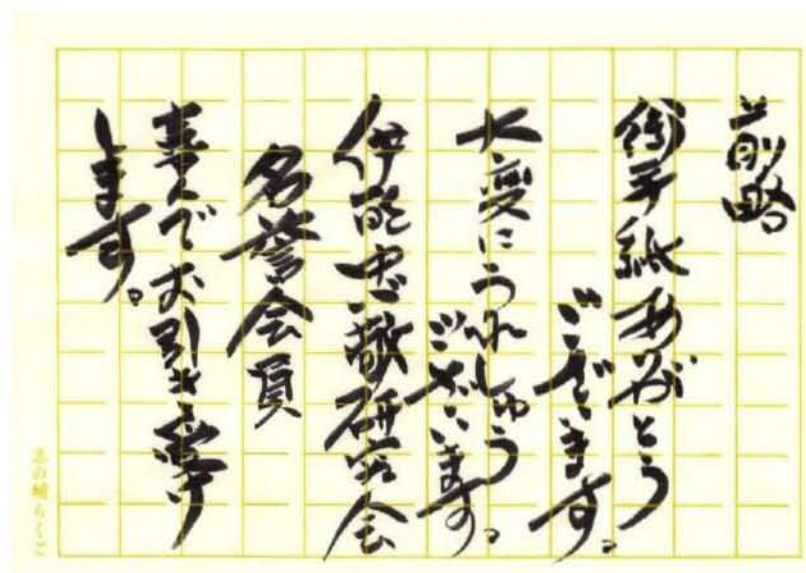
誌上総会

石川 清一

特報

立川志の輔師匠

伊能忠敬研究会名誉会員に！



大変遅くなり恐縮ですが、本年四月開催の伊能測量協力者顕彰大会で熱演された立川志の輔師匠に、研究会名誉会員をお引き受けいただきましたので報告します。

四月二十一日の顕彰会当日、落語会終了後、師匠と秘書の西須さん、本会側幹事の岩本、伊能、渡辺の三人と懇談をいただきました。

伊能氏より御礼を申し上げたあと、懇談となり、志の輔師匠に教養落語「伊能忠敬物語」を始められた経緯などを伺いました。「なんで、こんな長編落語を演じ続けているのかよくわからない」と話され、渡辺も「仕事でもないのに二十三年間も伊能研究という余計なことをやっています」「いやいやとんでもない素晴らしい事を・・・」など雑談のやり取りのなかで、名誉会員になっていただけのことになりました。師匠のような大看板に名誉会員になっていたただ話ですから、後日 鈴木代表、菱山事務局長と協議のうえ、私から御願状を差し上げ、御挨拶として、渡辺監修の「伊能図大全」の関東、近畿、中小図の三編を謹呈しました。これに対し、上記のお手紙と「志の輔落語DVD十一巻」の返礼をお受けしました。全国の伊能忠敬ファンの皆様、志の輔師匠の御後援をよろしくお願い申し上げます。

一八八八年十月

理事 名誉代表 渡辺一郎

立川志の輔事務所 シノフィス
〒107-0063 港区南青山二の二六の一六の八〇一
師匠へのメッセージは会報に掲載します。

九鬼隆範作成「京神間線路図」について

星埜由尚

明治初期に工部省において伊能図を参考として作成されたと思われる「京神間鉄道線図」について報告する。会員諸氏の見解を賜りたい。一昨年十一月、「伊能忠敬笹山領探索の会」を主宰されている加賀尾宏一氏のお招きを受け、丹波篠山を訪れた。「伊能忠敬笹山領探索の会」は、篠山における伊能忠敬が測量した道を探索し、標柱「伊能忠敬笹山領測量の道」を篠山市内に十二基設置されている。加賀尾宏一氏は、その中心となつて活躍されている方である。

その標柱の除幕式に招かれ、小学校での講話もやらせていただき、微力ながらお手伝いをさせていただいた。その道すがら、三田市を訪れ、三田城跡に近い旧九鬼家住宅を訪れた。現在は、旧九鬼家住宅資料館として公開されている。

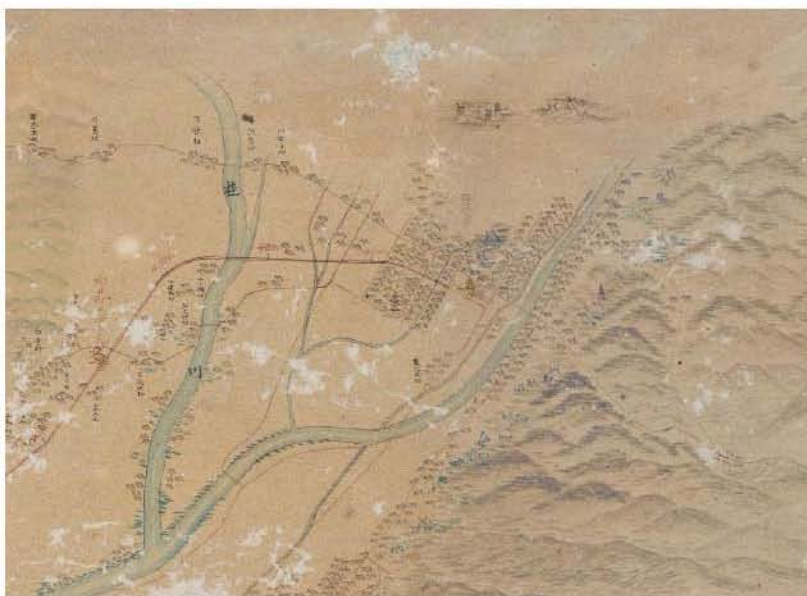
旧九鬼家住宅は、三田藩家老を務めた九鬼家の住宅として明治9年に九鬼隆範によつて建てられた擬洋風建築である。九鬼隆範は、天保六年の生まれで九鬼家の婿養子となり、明治維新後工部省に出仕して鉄道建設に尽くした。測量術に長け、「測地必携」を著している。明治十年の京都神戸間の鉄道開通に携わり、「京神間鉄道線図」を作成し、開通式の際、天覧に供したと言われている。

旧九鬼家住宅資料館を見学したとき、この「京神間鉄道線図」が展示されており、NPO法人歴史文化財ネットワークさんだ理事長池



京神間線路図

田洋介氏の説明を受け、一見して伊能図に酷似している印象を持った。池田洋介氏からはこの地図をより詳しく見る機会を与えていただいた。その結果、伊能図との共通点などについて以下の点が認められる。



京都（拡大図）

①地図の描き方について、全般的に見て伊能図の描き方と非常に似ている。
②城郭の描き方が伊能大図の城郭に類似する。特に、大阪城はほぼ伊能図を模写したと言えることができる。



大阪（拡大図）

③市街地の描き方が伊能大図の描き方に類似する。家並みの描き方、寺社の薨の描き方は伊能大図の描き方と同一である。

これらの点から見て「京神間鉄道線図」は、伊能大図を基図として作成した地図ではないが、伊能図を参考として当時の地物の状況に改変し、鉄道に関する情報を加えて作成した可能性を考えさせる。

工部省は、明治5年に伊能図の模写を行い、工部省に出仕した九鬼隆範は、伊能図を見る機会もあり、利用することもできる立場でもあったものと考えられる。当時、実測による地図は未だ伊能図のみであったから、「京神間鉄道線

図」作成に当たり、伊能図を利用することは当然考えられたものと思われる。
未だ推測の域を出ないが、伊能図が明治政府において鉄道建設においても利用されたことを物語るものとしてさらなる検討が望まれる。



伊能大図135号（大阪）部分 右120度回転
米国議会図書館蔵

書籍紹介

『伊能忠敬の足跡をたどる』

星望由尚 著

（公社）日本測量協会 刊行

A5判 150ページ（本文）

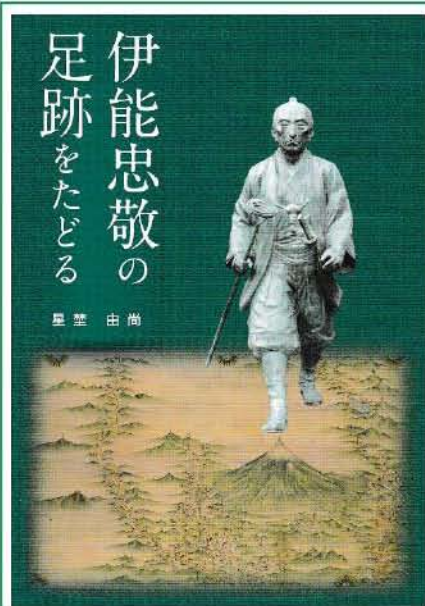
2018年5月28日 発行

本書は、平成二十二年七月から二十四年十一月まで六十回にわたり日刊建設工業新聞に掲載された測量日記と伊能図を対比させたコラムに十五話を加えた七十五話で構成され、一話が見開き2ページで統一されており、どこからでも気軽に読める。

本書は一般の出版社ではなく、公益社団法人日本測量協会から出版されたため、一般の書店やインターネット通販での購入はできないが、同協会に申し込めば入手は可能である。

<http://www.jsurvey.jp/2-1a.htm#inou>

（菱山剛秀）



史料紹介

『町方書上』と『寺社書上』

玉造 功

「町方書上」「寺社書上」とは

「町方書上」と「寺社書上」は明治新政府が江戸幕府から引き継いだ旧幕引継書の一つで、国立国会図書館のデジタルコレクションで閲覧できる。その解題などによると、江戸幕府は文政九年から江戸の地誌として「御府内風土記」の編集を始め、文政十二年に同書は完成したが、明治六年宮城火災のおりに焼失した。「町方書上」と「寺社書上」は、「御府内風土記」の資料として各町や寺社に命じて提出させたものである。

内容は町の位置・方角、町の成立の由来、町内の坪数・家数・公課、自身番、下水、橋梁、堀川、旧家などすこぶる詳細なもので、江戸研究には不可欠な文献である。

『町方書上』に見る黒江町

黒江町が提出したものは『深川町方書上、三』に収められており、タイトルは「地誌御調書上帳」である。町の始まりについては、寛永六年に地所築立によつて誕生した深川獺（漁）師町八ヶ町の一つであると記している。その後、町内に堀割が新たに作られるとその代地が与えられたり、加賀藩前田家の抱屋敷が置かれたりしたため、黒江町は複数個所に別れている。

黒江橋と久中橋は長さ六間、幅九尺であるが、八幡橋は長さ七間、幅二間あり富岡八幡宮への参道にかかる橋に相応しく立派である。

町内の自身番屋は一ヶ所あり間口は二間、奥行きは四間半である。その外にもわらじや駄菓子なども売る商い番屋が二ヶ所、髪結いがある床番屋が一ヶ所あった。

町内の総家数は四九七軒、その内、家持は四人、家守（家主ともいい、家持の所有する抱屋敷や長屋などを管理）が三一人、地借の記載はなく、店借（たながり）が二九九人、明き店が一五〇軒である。長屋住まいの店借の比率が高いのは深川の各町内に共通する特色である。

書上の文末の書き下し文は次の通りである。「子」は文政十一年（一八二八年）が該当する。

右の通り取調べ申し上げ候。以上

深川黒江町

名主助之丞幼年につき

後見

同所熊井町

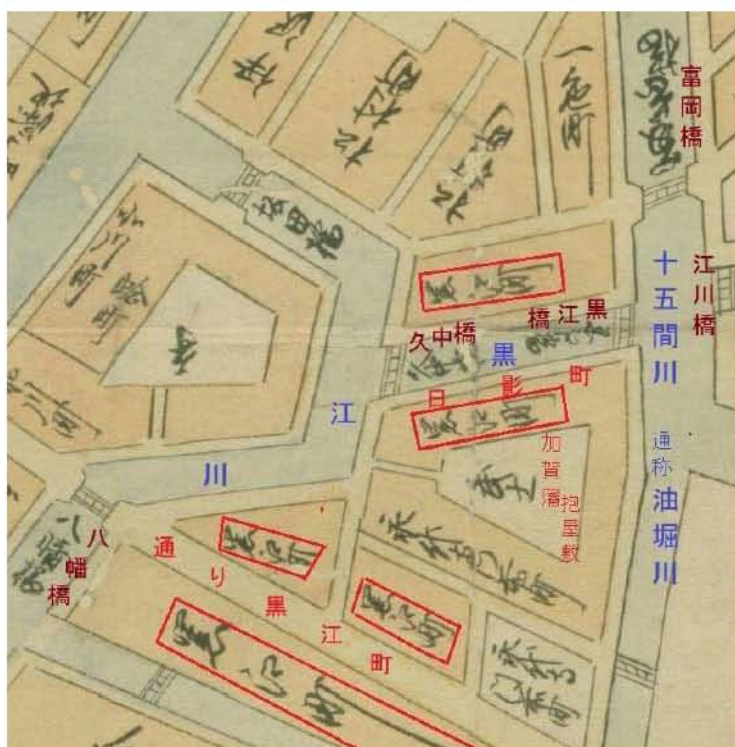
子八月 名主理左衛門

文化五年（一八〇八年）正月十九日の『伊能忠敬江戸日記』に、四国測量を前に提出した先祖書や明細書が記載されており、居住地については「当分深川黒江町名主齊藤助之丞地面借地」とある。忠敬が借地していた名主齊藤助之丞と、二〇年後の書上提出時の名主助之丞はどのような関係なのだろうか。幼年のため後見人が立てられているので親子なのだろうか。

なお書上によると、町内の人々は忠敬の隠宅のあった久中橋から黒江橋の南岸通りを日影町と呼んでいたという。

旧幕引継書の『本所深川町屋絵図』に加筆

国立国会図書館デジタルコレクション



史料紹介

加賀藩の測量隊受け入れ方針決定まで

河崎倫代

はじめに

享和3年(1803)の第4次測量における加賀藩(石川県と富山県の大半部)測量については、本誌にこれまで2回にわたって史料紹介してきた。

- ① 62・63・64号「第4次測量隊、中能登を行く—加賀藩十村真館四郎大夫「覚書」より—」
 ② 83号「加賀藩十村役の手代たちが見た伊能隊—「新田家文書」より—」

いずれも、測量隊に随行して案内役を務めた十村(とむら)幕府領・他藩では大庄屋)手代たちの見聞を記録した、藩庁への報告書である。加賀藩の対応については、伊能忠敬の身分が「元百姓、浪人」であり、また各地で村高・家数を書き出させるなど「隠密がましい」行動が見られることから、非常に警戒していたことが知られる。今号では、加賀藩庁がそのような立場を取るに至った経緯を、幾多の史料から詳細にたどってみることにした。

加賀藩領内測量に関する論考

加賀藩領内測量に触れた主な論考・出版物としては、大谷亮吉著『伊能忠敬』(1917年、岩波書店)、増村宏「大谷亮吉編著『伊能忠敬』の日本測量について」(保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』1974年、古今書院)、高瀬重雄著『越中の絵図』(1975年、巧玄出版)

版)、竹内慎一郎著『地図の記憶』(1999年、桂書房)がある。筆者も、「伊能忠敬の加賀藩領内測量をめぐって」(『金沢女子大学附属高校紀要 第9号』1992年)、「伊能忠敬の加賀藩領内測量関係史料」・「加賀藩十村役の報告書に見る伊能忠敬の領内測量」(『加能史料研究 第5・6号』1993・94年)などで史料紹介をおこなってきた。

大谷亮吉は『伊能忠敬』「日本測量時代 (八) 尾張及越前以東残部の測量」・「余録 (二) 諸侯と忠敬」で、次のように記している。

「北陸道方面に於ては、他の地方に比し沿海実測業務を比較的重大視し、自己の領内を巡測せらるるを喜ばざりしもの少からず。殊に加州藩の如きは、表面幕府の命を奉じて相当の便宜を与へ実測上支障を起すことなからしめたりと雖も、内心頗る不快に堪へざりしものの如し。忠敬が沿道村吏に各村石高、家数、人口等を記載せる文書の提出を求むるも、藩主よりその命なしとしてこれに応ぜざりしが如き、或は地図形容に資せんが為め沿道地勢等につきて質問するも、多く口を緘して其詳細を語らざりしが如き、或は藩庁より藩士を派して測量班に随従し其業務を監視せしめたるが如き、以て藩庁の意向を察するに足ると云ふべし。」

また、『伊能忠敬の科学的業績』「北陸地方の事例 2. 金沢前田藩の事例」には、前田藩では「藩の内部事情」や「測量についての疑惑」から、「沿海測量に神経過敏になっていた事実」は認められるが、「これら前田藩の諸事実を知っても、なお私は大谷氏の『藩士の監視』の事実を文字どおり認めることはできない。」

としている。ただし「文化二(一八〇五)年から測量隊が御用隊の性格を強化したのは、この前田藩の事例、糸魚川事件についての幕府・暦局側の反省からであったと考えられよう」と述べ、忠敬が文化元年(1804)に幕府役人に取り立てられ、翌年の第5次測量からは、「幕府直轄の事業」となり、測量隊の編成・出張手当・諸大名の協力ぶりなどが大きく変化する直接のきっかけになったと見ている。

加賀藩の測量隊受け入れ方針決定までの史料

加賀藩庁が幕府からの通達を受けて測量隊受け入れに至るまでを、諸史料を使って時系列にたどってみたい。

※は筆者注。史料本文中の(一)は筆者補足。「」は語句の訂正。史料本文の太字は重要部分を示す。

●2月17日、幕府勘定奉行、加賀藩に伊能忠敬の領内測量を告げる。

史料①「三守御譜」三(享和3年2月)

金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫
 十七日、御勘定奉行小笠原和泉守ヨリ聞番呼立、天文方為測量伊能勘解由東海道ヨリ御国元へ相廻り候二付、覚書を以被仰渡アリ、
 日記、十七日、勘定奉行小笠原和泉守より、御城中ノ口へ今日御呼出二付、不破氏(半蔵、聞番)被罷越候処、御勘定組頭田口五郎右衛門を以、天文方為測量伊能勘解由東海道より御国元へ相廻り候二付、覚書を以被仰渡候、右勘解由は百姓舂浪人者ニて、いまた公辺へ被召出ハ無之輕き者之由、

(解説①)幕府勘定奉行から測量隊の領内測量を通告さ

れる。忠敬は「百姓体浪人」「輕き者」と聞かされ、加賀藩での処遇の格式が決まった。

●3、4月、加賀藩御算用場、測量隊の待遇方について、郡奉行經由で配下の十村へ通達する史料②「簡井触留」『加賀藩史料』第十一編、享和3年3月28日条

此度為測量御用伊能勘解由申者、東海道筋を初め致巡路、御領国江罷越候段等、別紙従公儀相渡り候旨に而、御用番年寄中より被相渡候に付、写相達候条、被得其意、右勘解由先触到来次第、休泊、暨人馬繼立等、夫々不指支様可被申渡候、且又右勘解由、御領国に而江戸表江之紙面相願申儀も可有之段申来候条、是又可被得其意候、以上、

三月 御算用場

高田弥左衛門殿 ※能州郡奉行
菅野兵左衛門殿 ※能州郡奉行

猶以、右勘解由格式等之儀者、聞番より承合候所、高橋作左衛門弟子に而、いまた公儀江被召抱候儀に而も無之者に候間、敢而重き取扱に及不申旨、且勘解由上下六・七人に而、御用長持等為持、当二月廿五日頃江戸表発足之筈に候旨申来候間、右等之趣為心得申達候、以上、

天文方 高橋作左衛門弟子

伊能勘解由

右者、為測量御用、東海道筋品川より駿州沼津・江尻等に懸り、夫より海手に添、同国田中・遠州相良・三州五十崎・尾州師崎等、都而南之方海手に添相廻り、同州宮より佐屋・津島等陸路通り、美濃大垣江出、関ヶ原より越前国敦賀にむかひ、若狭之国境迄罷越、夫より又海手に添、東之方河野・三国等、夫より加賀・能登・

越中等都而北海之浦々に添ひ、越後出雲崎迄罷越、此所より佐渡江相渡り、同国四方浦々不殘相廻り、又越後江立戻、寺泊りより帰路同国長岡・上州高崎より板橋宿に向ひ、中山道通り当表江罷帰候事、

但、能登国之儀者、北江出張候地に付、地図より之為、同国川尻・今浜辺に而、勘解由弟子共之内より致手分、二手に相分り、一手者陸路に而飯山・高島通り、東之方七尾江罷通り、一手者海手に添ひ北之方相廻り、一所に落合候積り、

二月

右之通罷通致測量之間、指支無之様可致旨、堀田摂津守殿被仰聞候に付、此段申達候、以上、

菅野兵左衛門

能州鳳至・珠洲両御郡十村中

(解説②) 藩御算用場から通告を受けた能州奉行は、配下の十村へ測量隊ルートや忠敬の格式等を通達した。

史料③「真館家文書」82(石川県立図書館蔵)

「為測量御用伊能勘解由 御領国江罷附村役人等会釈之事」

別紙之通御算用場より申来候条、得其意、会釈等之儀、夫々不相洩様可申渡候、以上、

亥 四月朔日 高田弥左衛門 印

能州四郡 十村中

追而急速先々相廻可申候、以上、

天文方高橋作左衛門殿弟子伊能勘解由、為測量御用近々御領国江罷越候二付、支配所二において

村方役人共等会釈之事、

一、勘解由往来筋之村方ハ、其村役人耆人宛先立可申候、

一、宿方之義ハ、宿端より宿端迄役人耆人跡より為指添、其領之内ハ村役人等之内先立可申候、

一、昼泊等江ハ、村役人耆人宛、并十村手代も為相詰、諸用為相并可申候、

一、往来之村々才許之十村手代耆人跡より為相添、并十村義ハ昼泊江用事も無之哉与罷越候様二可申付候、会釈之義ハ御代官手代同事二いたさせ可申候、

一、昼泊宿亭主袴着用可為致候、上下二ハ及申間舖候、

右之通、私共詮義之上御達申候、当御指図御座候様仕度候、以上、

亥三月十四日

杉山新平

菅野兵左衛門

松崎左兵衛

※能州郡奉行
※新川郡奉行

御算用場

別紙之趣、御用番江相達候處、紙面之通可相心得旨被申聞候条、可被得其意候、以上、

三月廿八日

高田弥左衛門殿

菅野兵左衛門殿

(解説③) 加州・能州・(越中) 新川三郡奉行が測量隊処遇を詮議して藩御算用場の指図を仰いだところ、御算用場からそのように取り計らうようにとの達しが来た。「公儀召し抱え」ではない「元百姓、浪人」であるから、十村は挨拶に出ないで、「巧者な手代」に対応させる。ただし、十村は昼・泊所へ出向いて、(手代たちに)「用は無いか」と聞きサポートするこ

と。百姓身分の忠敬に十村が挨拶する必要はない。裏で指図をするようにという方針だった。

●5月21日、加賀藩天文暦学者西村太冲が弟子小原治五右衛門を使いに出し、美濃国関ヶ原に逗留中の忠敬に、「能登一国測量手伝い」を願ひ出る。

史料④「伊能忠敬測量日記」

(享和3年5月20日～22日)

五月二十日、朝六ツ頃小雨、無程止、夫より終日度々大雨、昨日より美濃国関ヶ原を写す、此日尾州お茶壺通る、此夜越中城端西村太冲門人小原治五右衛門、高橋先生并西村太冲の書状持参、当宿江着、直に尋向可致候所、夜分二付、明朝可罷出旨申越す、

五月二十一日、朝小雨、五ツ後二止、夫より曇、小原治五右衛門、高橋先生并西村太冲の書状持参対面、

(高橋至時書状と西村太冲書状写は省略)

五月廿二日、朝より晴、六ツ半頃関ヶ原宿出立、(中略)春照宿(中略)八ツ後に着、止宿本陣木原新左衛門、此夜曇天、不測量、

大公儀より加州江御触写し、小原氏持参なり、心得二写し置、

天文方 高橋作左衛門弟子 大公儀触

伊能勘解由

右者、為測量御用、東海道筋品川より駿州沼津・江尻等江懸、それより海手に添ひ、同国田中・遠州相良・三州五十崎・尾州師崎等、都而南之方海手ニ添ひ相廻り、同国宮より佐屋・津島等陸地路通り、美濃大垣江出、関ヶ原より越前敦賀ニ向ひ、若狭境迄罷越、夫より海手に添ひ、東之方河野・三国等、夫より

加賀・能登・越中等、都而北海之浦々ニ添ひ、越後出雲崎迄罷越、此所より佐渡江相渡、同国四方海手浦々不残相廻り、又越後江立戻、寺泊より帰路、同国長岡・上州高崎より板橋宿ニ向ひ、中山道通当表江罷帰候事、

但、能登国之儀ハ、北江出張候地ニ付、地図より之ため、同国川尻・今浜辺ニ而、勘ヶ由弟子共之の内より手分致し、二手ニ相分り、一手ハ陸路ニ而飯山・高畑通、東之方七尾江罷通、一手ハ海手ニ添ひ、北之方相廻り、一所ニ落合候積り、右之通罷通致測量間、指支無之様可致旨、堀田摂津守殿被仰聞候ニ付、此段申達候、二月

御算用場より御出しの写

此度為測量御用、伊能勘ヶ由と申者、東海道筋を初致巡路、御領国江罷越候段、別紙従公儀相渡候旨ニ而、御用番年寄中被渡候ニ付、写相達候条、被得其意、右勘ヶ由先触到来次第、休泊、暨人馬継立等、夫々不差支様可被申渡候、且又右勘ヶ由義御領国ニ而江戸表江之紙面相頼候義も可有之段申来候条、是又可有其御心得候、以上、

三月十六日

御算用場

井上勘右衛門殿

※今石動等支配

猶以、右勘解由格式之義、御開番ニ而承り合候所、高橋作左衛門弟子ニ而、未公儀江被召抱候義ニ而も無之者ニ候間、敢而重キ取扱ニもおよび不申旨、且、右勘解由上下六七人ニ而、御用長持等為相持、当二月廿五日頃江戸表発足之筈之旨申来候間、右等趣為御心得申達候、以上、

此度為測量御用、伊能勘解由と申者、東海道筋を初致巡見、御領国江罷越候段、略文等別紙従公儀相渡候書面写、御算用場添紙面を以申来候ニ付、夫々可申渡之旨被仰下候、依而写両通、相越候条、各被得其意、休泊・人馬継立等不指支様可被相心得候、右、勘解由義都而海辺ニ添罷通候段申来候得共、其地江罷越候義も難斗候間、宿等心得之義可被申渡候、勘解由義、公儀へ被召抱候義ニ而も無之、重キ取扱ニおよび不申候間、先宿等振承合、其時宜ニ而取斗可被申候、以上、

亥三月十九日 鎬木右平 ※越中の十村か

城端役人中

猶以、能州ニ而者、勘解由弟子之内、手分有之義ニ候間、西村太冲同心之事ニ候条、自然可申来儀も難斗候間、其心得太冲申談可然と存候、以上、

(解説④)大坂で麻田剛立に天文暦学を学んだ西村太冲が、加賀藩領内での測量手伝いを忠敬に願ひ出た。

その際、太冲の弟子小原治五右衛門が藩御算用場からの御触れ等を写して持参したので、忠敬は加賀藩での「軽き扱い」を予想できたと思われる。

●5月29日、加賀藩庁、大聖寺藩の郡奉行を通じて、大聖寺藩領塩屋村の海運業者に、敦賀近辺での測量隊の情報収集を依頼し、その返事が届いたので御郡奉行へ知らせる。

6月、奉行所から「家数・村高を書き出すことはならぬ」と通達が出る。

史料⑤「享和三年御用留」荻谷村岡部家文書

態与啓上仕候、暑相催候得共、先以其御地貴家様御堅勝ニ被成御座目出度奉存候、次ニ当地無

異儀罷在申候、乍慮外貴意思召可被下候、誠ニ先日者上筋へ御開合御越被成、其節御帰御立寄被下、宿ニ在合不申不得貴意、残念ニ奉存候、且又今度天文方御役人様御巡国、近頃越前方御通行被成候様承申二付、若狭迄飛脚差遣申候処、返書参申候間、又々為御承知申上候、猶追々承次第可申上候、折節多用ニ而乱筆御用捨可被下候、右申上度如此御座候、以上、

五月廿八日 庄屋七郎右衛門

大町屋宇兵衛様

尚々先達而御出被成候御下役下田和兵衛様江急度御伝言被仰上可被下候、以上、

西野小左衛門より若狭迄飛脚差遣申二付、返書之写

但小左衛門儀者吉崎境塩屋村之者ニ而、大聖持様御用聞舟手之者故、若狭・敦賀等二問屋有之、開合等ニ手寄之者故被仰付候由、中西与申茂右同断ニ而、米書之義為御心得之書記置申候、

先達而中西様より御尋被下候、此度天文方御役人様御巡国ニ付、当地御着日并御馳走振之様子、委細可申上様被仰下、御地ニおゐてハ御上様より被為仰付候由、御尤承知仕候、早速当地御役先迄相尋申候処、当月廿六、七日頃当所御着可被遊御様子之由、先日も中西様へ有増以書付申上候趣とハ、大分手重ニ相成、町奉行様御旅宿迄御見舞被遊候御図リニ相成候由、郷方者御代官様御見廻可被遊候、是ニ応諸事少々御取扱も相違可仕様子御座候、尤御歩行者一日二漸二三里程ならてハ出来

不申、尤泊リ宿ハ先之宿より御極、先触出候御事ニ御座候、扱又御心得入用之儀者御旅宿老軒ニ而相済候様、間取ハ四間入用之由、則上老間御主人様、中老間御弟子・御侍四人、次老間御家来三人、又老間道具衆置場、少広キ方長持等之衆、外二九尺二五間半斗之地面入用之由、若其宿之表裏共無之候ハ、近辺ニ有之候而茂不苦、同村庄屋年寄出迎候事、其村之間尺・家数・石高・御領分等具ニ御尋、村役人之印形ニ而書付御取被成候由、六ヶ敷事ニ御座候、決合ハ一向相知不申候由、前段ニ承候事ハ申上候得共、何分此節ニ至リ、少々模様違被成、又々御来駕之上臨機応変ニ而違可申由、依之当所御着之上、御取扱相済、御出立後直御飛脚ニ為御知可申上候、漸一日二二、三里程ならてハ御歩行不被遊候、御出立後早速為御知申上候而も間ニ合可申哉与奉存候、今日申上候而も又間違申時ハ御混雜可相成と奉存候、此度之飛脚留置候而も日数難斗候間、直様御返申上候間、其段御承知被成置可被下候、嘸之御心地奉察候、

【口語訳】

西野小左衛門が若狭まで飛脚を差し遣して得た返書の写です。

ただし、小左衛門は吉崎境の塩屋村の者で、大聖持様（大聖寺藩）の御用聞き海運業者で、若狭・敦賀などに問屋があり、聞き合わせるつてを持つ者なので、仰せ付けられました。この米書（※印、ただし書き）は心得のために書き記し置くものです。

先立つて中西様から御尋ねのあった、この度の天文方御役人様御巡国について、当地への着日や御馳走振りの様子を詳しく申し上げるよう仰せつかり、御地では御上からの仰せ付けとのことで、御もつともと承知致しました。早速、当地の御役先まで尋ねたところ、当月（五月）二六、七日頃当所へお着きになる様子です。先日、中西様へあらましをお知らせしたのは違つて、（当地での対応は）大分丁重になったようです。町奉行様が旅宿まで（伊能忠敬一行を）お見舞に出られるおつもりのようなようです。郷方では御代官様がお見廻りなさるようです。これに準じて、諸事お取り扱いも違つてくる様子です。もつとも、（測量隊の）行程は、一日にようやく二、三里程にしかならず、泊り宿は先の宿で決めて、先触を出すそうです。さて又、御心得入用の件ですが、旅宿は一軒で済むように、間取りは四部屋入用とのことです。すなわち、上部屋一室は御主人様（忠敬）、中の一室は御弟子・御侍四人、次の一室は御家来三人、もう一室は道具衆の置場で、少し広い部屋で長持等を置きます。外には、九尺に五間半斗りの地面が入用とのこと。もし宿の前にも裏にもそのような空き地が無いときは、近辺でも構わないとのこと。村の庄屋・年寄が出迎え、その村の間尺・家数・石高・御領分等をつぶさにお尋ねになり、村役人の印形のある書付をお取りになるそうです、難しい事にございます。取り決め

については、一向存じないとのことですが、

承ったことは前段で申し上げましたが、

何分この節に至って、少々模様が違っています。

(忠敬) 御来駕の上で臨機応変に(対応を) 変えるようなので、当所にお

着きの上、(測量隊への) 対応が済んで御

出立された後、すぐさま飛脚でお知らせ申

し上げます。一日にようやく二、三里程し

か進みませんので、御出立後、早速にお知

らせしても間に合うと存じます。今日申し

上げても、また変更があった時は混乱なさ

ることと存じます。この度の飛脚を(当地

に) 留め置いて、(どれだけの) 日数がか

かるかはかり難いので、直ぐ様お返し申

し上げますので、ご承知置き下さい。さぞ

や(気がかりか)と御心地をお察し致します。

(解説) この部分、若狭(敦賀)からの返書である。

敦賀での処遇方針が今後も変更する可能性がある

ので、測量隊通過後に詳細を知らせる。測量隊

は1日に2、3里しか進まない。

宿所では4部屋が必要。(天測用の) 空き地は、

宿所に無ければ近辺でもいい。村々の間尺・家

数・石高等をつぶさに尋ね、村役人押印の書付を

求めるなど難しい事だ、と知らせている。

右天文方御通行之儀二付、大聖持御郡より若

狭表聞合之趣、十村右村新四郎手代庄屋七郎

右衛門より私手代宇兵衛迄指越申二付、式通

共継立上之申候、猶更承合追々可申上候、以

上、

亥五月廿九日 今江村 源助 ※十村

杉山新平様 ※加州郡奉行
福島七之助様 ※加州郡奉行

公儀御役人五月〔廿脱〕八日敦賀江御移之処、

村々家数并村高等も可書出旨御申渡御座候由、

大聖持様御領之宿より聞合、加州方迄申送候二

付、右之趣等能美郡より御郡所へ御達被成候処、

家数并村高可書出旨申談候共、一円不相成旨相

答可申旨、御触出ニ御座候、尤杭木村境為打申

儀等浦触ニ御座候得共、是も品ニより不相成趣

ニも可相成哉、何連ニも御窺ニ相成居申様子ニ

御座候、尤ケ様之儀書出申御用義ニ候ハ、先

達而公儀より御触出も可有之処其儀なく、旁書

出申儀難相成と申答候様ニ与、被仰渡候由ニ御

座候、猶更大聖持御領より遣候聞合之趣、別紙

写指上申候、以上、

六月二日 苗代 与四兵衛

主附四人宛所

為測量御用公儀御役人御通行之儀二付、苗代与

四兵衛等紙面両通為御承知相廻候間、先々御順

達落着より四郎大夫方へ御返可被成候、以上、

六月七日 武部村 四郎大夫 ※十村

鰻目村 五兵衛 ※十村

高田村 喜三次 ※十村

堀松村 平蔵 ※十村

仲間宛所

右之通、六月九日酉刻時分本江より到来、十日

午刻堀松へ送ル、

(解説⑤) 大聖寺藩領右村(加賀市三木町)の十村新四

郎の手代七郎右衛門が、藩の意向を受けて塩屋村の

海運業者西野小左衛門に情報収集を依頼した。西野

は若狭・敦賀まで飛脚を遣わした。返書が届いたの

で、加州郡奉行杉山新平・福島七之助へ達し指示を

仰いだところ、奉行からは、家数・村高を書き出し

提出してはならない、村境に杭木を打つことも異論

があると言われた。苗代村(小松市)の与四兵衛か

ら能登口郡(羽咋郡・鹿島郡)の十村に、十村から

配下の村々へ刻付の御触れが廻った。

(補足) 測量隊は5月27・28日敦賀に宿泊。しかし、

名古屋近辺で流行していた麻疹に隊員が次々に罹患

し、5月27日〜6月3日まで、忠敬と息子秀蔵の2

人で測量したことが『測量日記』から読み取れる。

●5月末、藩御算用場より各郡奉行に、「先触」

以上の人足や杭の用意は不要、「隠密がましき」

質問への警戒を促すよう通達を出す。

史料⑥「加藤氏日記」十(享和3年)

金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫

為測量御用伊能勘ヶ由巡行二付、御領分へ罷越

候節、取扱方并上下人数等之義、御用番より被

申談方之趣、先達而一統相触置通二候之所、先

宿方申送等之旨二而、村境へ人数三十人余為指

出、村境ニ杭為打立、且村之内高数并海辺岸村

境迄道程相尋候様之義も有之旨二付、是等之趣

如何可被相心得哉之旨被申聞、先宿より申送方

等如何有之候共、御領分二而者其手当二不及、

先達而申達候通、右勘ヶ由上下六七人并御用長

持懸り之人足勿論、其外二も通行二付、何村よ

り何村迄召連或荷物杯為持候二付而、入用之人

馬者不指支様渡可申事二候、右之外二人足不指

出義并杭用意不致義難心得様申聞候者、其義ハ

先達而公辺より何等之被仰渡も無御座様子二而、

役人共より何等之義不申渡段相伺可申、其上二

而早速右等之用意仕、杭等致指図為打可申段申

聞候者、其義一往其向役人へ達候上二無御座候てハ、仕兼候与相答可申候、

一、村之内高方并海辺岸、暨村境より村境迄、一村々々町間相尋、其外右類御隠密かましき義相尋候共、下々役人共心得二而難答、金沢表夫々向々役人へ不申達而者難答段、相答候様可被申渡置候、其上承度旨申聞候者、其段可被申越候、

但往還通りハ不及申、其外村々伝へたりとも、通行筋之道程之義相尋候、是迄覺罷在通答可申候、

一、能州島之内巡行之義も委曲被申聞候得共、右巡行指留之義難相成義二候之間、流刑人之義ハ其節不縮無之様相心得置宜義二候、尚更右之趣可申談置旨、御用番へも相達置候条、左様可被相心得候、以上、

五月

御算用場

進士求馬殿 ※砺波射水郡奉行
長屋平馬殿 ※砺波射水郡奉行

右之通申来候二付、写指遣之候条、得其意夫々可申渡候、尤勘ヶ由能州へ罷越候ハ、逗留等之様子、尚更承合可申聞候、以上、

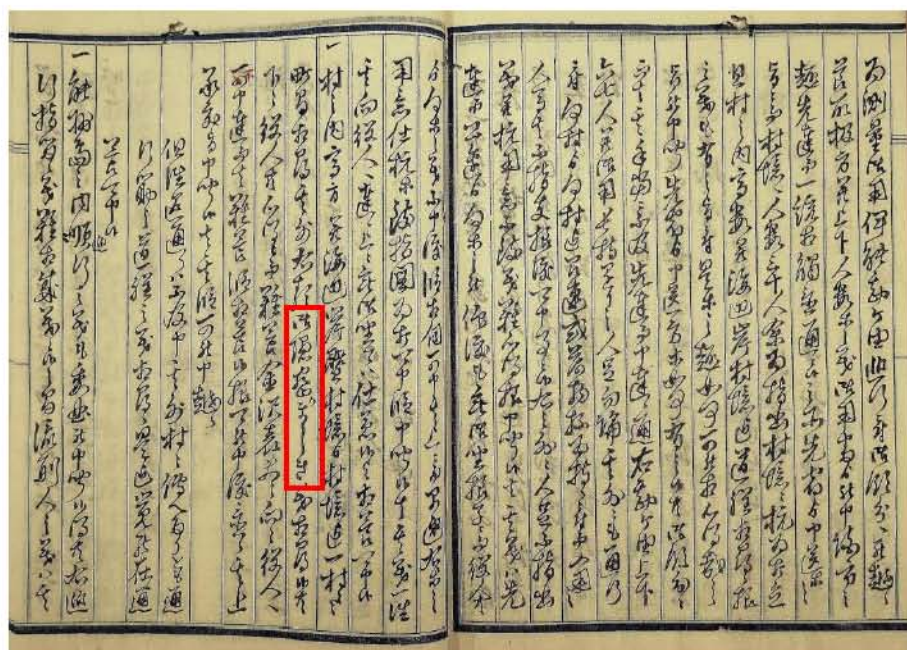
亥六月三日

進士求馬 印

御扶持人

十村中

(解説⑥) 藩御算用場より各郡奉行への御達しの中に「隠密がましき」という表現が見られる。加賀藩では測量隊に警戒心を持ち、村高・家数など「隠密がましき」ことには答えない、村境に杭を打たせない(のち、方針変更)、能登島巡行の際には流刑人の締め方方に注意する、等の対応策を指示した。藩庁からの通達には郡奉行から配下の十村へ、十村から各村々へ伝えられた。なお加藤氏は羽咋郡の歴代十村。



右は、加越能文庫「加藤氏日記」中の、「御隠密かましき」と記された箇所。

●6月15日、藩年寄長甲斐守連愛、西村太沖の「測量手伝い願い」を不許可にし、忠敬との「書通」「面話」も禁じて城端町に禁足する。

史料⑦「袖裏雜記零余後録」三

金沢市立玉川図書館近世史料館加越能文庫

十五日、(中略)測量御用として罷下候伊能勘ヶ由儀、御領国江罷越候節、西村太沖(沖、以下同)・小原治五右衛門江手伝頼度旨、太仲等へ紙面指越、依之左之通同候之通被仰出、伊能勘解由より越中城端西村太仲等江之紙面、井上勘右衛門出之紙面之通承届可申哉と奉存候得共、勘右衛門口上に而申聞候付、御用人間番了簡相尋候処、勘解由より頼越候儀に御座候間、差支申儀も有御座間敷与奉存候旨申聞候へとも、猶更御算用場奉行江も申聞詮議仕候候、勘ヶ由「太沖」儀元来城端之産と申沙汰に御座候、寛政六年にも海辺之村々等御書上に御座候、寛之品を以御しらへも被仰付候哉、然所太仲等手伝仕候得者、海辺等之様子委ク申伝候様成事にてハ不可然様奉存候間、太仲等不罷出様二被仰渡方も有御座間敷哉与奉存候間、尚更詮議御座候様奉存旨申聞候、右申聞候所も無拠相聞候付、不被差出時如何申渡可然哉与内存相尋候候、支配人より徘徊留と申様成事二申渡候様成義二而も可有之哉之旨申聞候、何れ二も不差出趣二取計可然儀と奉存候付、勘右衛門江も内分申渡方相尋候所、左候ハ、御様子有之候間、病氣とか申立、不差出趣二取計候様被仰渡候ハ、其段可申渡旨申聞候付、猶更御算用場奉行へ申聞候候、其通被仰渡候而も左支申間敷と存候、尤書通ハ不仕様被仰渡可然様奉存候旨申聞候、右之趣二御座候間、公辺御役人之儀、御様子有之候条、為手伝罷出候儀、并及面話候儀も不相成候、依之此度輕返事遣候儀は格別、以後致書通候儀堅不仕様可申渡旨、勘右衛門江申渡可然与何も僉議仕候、勘解由紙面被入御覧申候、猶更被仰出次第奉心得候、以上、

六月十五日

長甲斐守

〔解説⑦〕八家（はつか）加賀藩では1万石以上の年寄職が八家あり、月番で御用番を勤めた。「加賀八家」と総称）の長甲斐守連愛が、同じく八家で御用番の横山山城守隆盛に宛てた書状である。西村太冲の「測量手伝い願い」を不許可とした理由は、寛政6年（1794）におこなった海辺村々の調査結果が幕府に知られてしまうことにあった。西村は「病氣」とされて城端町に禁足。忠敬との「書通」、「面話」も禁じられた。

●6月27日、測量隊、25日に越前国から加賀国に入って大聖寺藩領の測量を進め、この日、加賀藩領の測量を始める。

史料⑧「伊能忠敬測量日記」

（享和3年6月27日）

六月二十七日、朝六ツ後雨止曇る、六ツ半頃橋立村出立、（無程雨、午前に止）小塩村、田尻村、千崎村、塩浜村、篠原村（木曾義仲と平家合戦の地なりと云、不審、右五ヶ村同領、昨日郡蔵・良助仕越に測、伊切村〔無高、家六十軒イ〕、新保村〔高五百四十石三斗、家六十軒イ〕、浜佐美村〔無高、家六十八軒イ〕（新保迄江沼郡、当村より能美郡）、日末村（即能美郡、此所まで大聖寺領）〔高四百二十一石九升、家八十軒イ〕、安宅浦（同国同郡、是より松平加賀守領分〔従是断に付、高・人家を書さずイ〕）九ツ後に着、止宿田端〔川端〕町網七左衛門、右領分界より十村大庄屋の番代と云者出て案内す、村高・家数等を問とも、領主より差図なしと云、其外山・嶋を問共不云、漸測量地の村名を聞のみ、

此夜曇、不測量、元吉町迄泊触を出す、（此安宅は謡にある安宅の関なりしよし、今は変じて往古の関の地所は海崩して二里も海中になりと云り）

※「イ」は、『伊能忠敬先生日記』の記述

〔解説⑧〕加賀藩の支藩大聖寺藩内では、十村が挨拶に出、『測量日記』には村高・家数が記されている。本藩に入った安宅浦（小松市）で、案内役の十村手代が「領主の指図なし」として返答せず、以後は村高・家数の記載はない。ただし、能登に60数カ所点在した幕府御預地の村々では、掛り下役の藩士が見舞いに出、庄屋（加賀藩では「肝煎」きもいり）だが、幕府領なので「庄屋」が案内し、村高・家数を答えている。大谷亮吉が「藩庁より藩士を派して測量班に随従し其業務を監視せしめた」としているのは、この幕府御預地での掛り下役を指していると思われる。「監視」とは逆に、「幕府御用」への当然の任務だったといえよう。

測量隊に対する「軽き扱い」は加賀藩に限らず、第1〜4次測量隊を受け入れた諸藩にある程度共通した認識からきていた。その原因は、幕府勘定所からの通達にあったと考えられる。前出の増村宏論考には次のように記されている。

弘前藩御国日記（弘前市立図書館所蔵）には、江戸城中の勘定所へ藩庁の聞番が呼ばれ領内測量の通達をうけたとき、忠敬の身分につき「伊能勘解由儀帯刀御免斗二而、格式等無之ニ付、諸家方中小姓位之格二而取扱可然旨」を聞き、その旨が領内に通達してあった。

『測量日記』享和2年8月9日の項には、弘前での待遇に忠敬が憤慨した様子が記されているが、加賀

藩の場合と同様に、その遠因は幕府からの通達にあったといえよう。

おわりに

これまで、「隠密がましき」という一語が独り歩きしている感がありましたが、今回、その出典史料を紹介できてホッとしています。

今年、伊能忠敬没後200年にあたって、当研究会が発行した『伊能忠敬 日本列島を測る―忠敬没後200年―』は、測量隊が宿泊した全国850の自治体に献本されました。当該市町村の教育委員会が図書館に収蔵されていると推察されます。

青森県ページでは、前出の弘前での処遇を巡り忠敬が憤慨した様子が紹介されていますが、全国46都道府県についても、当会誌に掲載された会員諸氏の玉稿を大いに活用させていただきます。記念誌編集担当者として改めて御礼を申し上げます。

今後は、記念誌記載情報に関連して、さらなる史料の発掘・紹介、疑問・異議などのご意見投稿が増えることを期待しています。すでに、岡山県、鳥取県、福岡県などのページについてご意見やご指摘が寄せられています。今後も、次のアドレス宛にお送りください。よろしくお願いたします。

・ kinenshi@inoh-ken.org

・ kakawa616u138@yahoo.co.jp

最後に、今回の史料紹介では、室山孝会員に金沢市立玉川図書館近世史料館等で史料校合にあたっていただきました。感謝申し上げます。

『奥地実測録』を読む①

忠敬をして地度を測定せしむ

前田 幸子

はじめに

文政四年七月十日に『大日本沿海奥地全図』が幕府に上呈された際、同時に『奥地実測録』が提出されたことはよく知られている。しかし、その具体的な内容についてはこれまで紹介される機会があまりなかった。全巻、漢字の羅列で読みにくいからであらう。しかし、読んでみると、なかなか興味深い内容が含まれている。今回は『奥地実測録』の概要と「首巻」について、実物の画像を示しながら紹介してみたい。

『奥地実測録』とは

『奥地実測録』は『大日本沿海奥地全図』大図・中図・小図の付録として提出された伊能図のデータ集である。第一巻から第十三巻には沿海、街道の里程、島嶼、湖沼、蝦夷地などについての実測値が収録されている。これに序文、凡例、目次を収録した首巻を付して計十四巻からなる。首巻に収録された「序文」「凡例」には測量事業の目的、経過、終結について述べてあり、伊能測量の実情を垣間見ることができる。第一巻から第十三巻についても、地名と数値の連なりの中に興味ある事実を見出すことができるが、今号では首巻の内容を検討することとし、次号で一巻から十三巻に記録されたデータについて注目することとしたい。

成立と経過

前項でのべたように、『奥地実測録』の首巻は序目、すなわち序文・凡例と目次であるが、後述するように、序文は忠敬の署名があるものも含めて忠敬の著作ではない。一方、第一巻から第十三巻のデータは勿論、忠敬自身の手になるものである。しかし従来、『奥地実測録』は注目されてこなかった。その理由は、この実測録が文政四年に上呈されて紅葉山文庫に収蔵されたあと、明治の皇居火災により焼失したとされていたことにもよる。大谷亮吉『伊能忠敬』でも『奥地実測録』は「明治六年五月五日皇城炎上の際遂に灰燼に帰し、今またこれを覧る能はず」としており、実測録の原本は存在しないと、長い間考えられていたのである。

正本の存在

しかし近年、『奥地実測録』が実際には焼失を逃れ、現在も国立公文書館に保存されていることがわかった。これについては、会報62号で「特報 伊能図とともに幕府に上呈した『奥地実測録』正本を確認」で鈴木純子氏による詳細な報告がなされている。それによれば、二〇一〇年六月現在、国立公文書館に三種類の『奥地実測録』が計三セット所蔵されているが、そのうちの一セットは十四巻の外に『地図接成便覧』一冊を備えていること等により、紅葉山文庫に収蔵されていた正本であると確認された。なお、他の一セットは昌平坂学問所旧蔵、もう一セットは太政官正院地志課旧蔵のものである。本稿では紅葉山文庫旧蔵の正本『奥地実測録』の原文にもとづいて読んでいくこととしたい。

『奥地実測録』の構成

首巻

序文 高橋景保
序文 伊能忠敬
凡例 伊能忠敬
又誌 高橋景保
奥地実測録総目 卷之一 沿海

(中略)

卷之十三 蝦夷

第一巻 沿海
第二巻 街道一
第三巻 街道二
第四巻 街道三
第五巻 淡路 四国 隠岐 佐渡
第六巻 九州、沿海
第七巻 九州、街道
第八巻 壱岐、対馬
第九巻 嶋嶼一
第十巻 嶋嶼二
第十一巻 嶋嶼三
第十二巻 湖沼
第十三巻 蝦夷
附 地図接成便覧

正本『奥地実測録』

紅葉山文庫旧蔵本



附 地圖接成便覧



刊本『大日本実測録』

国立公文書館に収蔵されている手書本『奥地実測録』三セットのほかに木版刷で刊行された『大日本実測録』がある。旧福井藩松平家所蔵の写本を原本として明治三年（一八七〇）に大学南校（東京大学の前身）から刊行された。内容は首巻および第一巻、第十三巻の計十四巻で、当時、大学別当兼侍講だった福井藩主松平慶永（春嶽）の序文が付されている。明治になってからの刊行であるため、「江戸」は「東京」と表記されている。また、献上本との間に本文の異同（誤脱）が少なからずあるとされる。



『大日本実測録』の全文は国立国会図書館近代デジタルライブラリーで自宅でも閲覧することができる。

◆『輿地実測録』首巻の内容◆

首巻の構成

首巻は巻頭に高橋景保の序文、ついで伊能忠敬の序文と凡例、さらに高橋景保又誌と記した追記のような文章があり、目次がそれに続く。序文はいずれも『大日本沿海輿地全図序』と題し、『輿地実測録』の序文ではなく、『大日本沿海輿地全図』についての序文となっている。

『大日本沿海輿地全図序』高橋景保（原文①）

地図事業の責任者である高橋景保の序文は測量事業の経過の要点をまとめて簡潔である。そもそもこの事業は経緯度の測定を目的として開始されたこと、たまたま幕府の蝦夷地開拓の機運に遭遇し、特に忠敬という適任者を得たことで測量が可能になったことを挙げている。全体に忠敬の資質をたたえ、また父至時の建言によって開始されたことを強調し、最後に『大日本沿海輿地全図』が完璧であることを述べ、忠敬の功績を称賛して序文を結んでいる。

この序文は測量事業の第一目的が緯度測定だったことを明言しているが、かつて將軍吉宗は国絵図の不正確さを嘆き、天測と実測による正確な地図づくりを企図したが果たせなかった経緯がある。景保はこの科学的な地図は忠敬がいなかったら不可能だったと断言し、中国にも優越する業績であると高く評価している。

なお、大谷亮吉『伊能忠敬』は『忠誨日記』中の記事から推測して、この景保の序文は佐藤一斎が代作、もしくは添削したものとして述べている。その記事とは『忠誨日記』（文政四年）六

月二十九日 早朝、予、佐藤へ行く。高橋侯の序文、高橋遣し候由、先生云う。」という記述を指しているとみられる。当否は不明だが、序文の内容からみて、一斎の全くの代作であるとは考えにくい。一斎が関与したとしても、校閲もしくは添削程度だったのではないだろうか。

『大日本沿海輿地全図序』伊能忠敬（画像②）

忠敬の序文は、忠敬の没後に久保木清淵が執筆したものであると言われる。『忠誨日記』に

（文政四年）六月五日 予、御役所に行く。

序文下書、津ノ宮より来る。飯嶋与衛門、筆工に来る」とあり、清淵が下書きしたものを飯嶋与衛門という人物が筆記したもののようである。この飯嶋与衛門については資料がないが、保柳睦美は漢学者であるとしている。根拠は不明であるが、たしかに筆耕の職人芸に終わらない立派な筆跡である。序文の内容は景保の序文と同様、測量事業の発端を至時の建言にあると書き起こし、漢学者らしく漢語を駆使して測量事業の顛末を述べて長文である。修飾語が多いが、天測の重要性、蝦夷地の未測部分は間宮林蔵のデータで補ったこと、完成に七年かかったこと等、客観的な内容である。最後にこの地図は詳細ではあるがまだ不十分な点があるから、さらにこの地図を補正するよう人に命じて少しでも集大成に近づけてもらいたいと述べている。ここが景保の序文とは異なる点であり、『沿海輿地全図』の完成が予定より著しく遅れたのは、何らかの欠点があつて、それを修正できなかったことによるのではないかという推測を裏付けるような記述となっている。

『大日本沿海輿地全図凡例』伊能忠敬（原文③）

地図の例言の箇条書きであるが、事務的な記述の中にも所々に伊能測量の特徴が垣間見える。まず冒頭で海浜はすべて実地に踏査したことを宣言している。また仙台から野辺地までは全て歩測のみで測ったこと、蝦夷地の未測部分については間宮林蔵が測量した数値で補ったこと、さらに緯度一度の距離を二十八里二分と算定したこと、ただし経緯度線は大図には書きにくいので、中図・小図にのみ書き入れたこと等を挙げている。緯度経度についての解説が詳しい。なお、この凡例も清淵の下書きを飯嶋与衛門が浄書したものとされるが、字の大きさや勢いから別人の筆跡のような印象を受ける。

『高橋景保又誌』高橋景保（原文④）

この文章は景保による追記のような形で、測量事業および地図作成作業に携わった人々の名前を並べてその労をねぎらい、また功績を讃えている。ただし、人名の挙げ方が異例である。原文には測量隊十三人と地図製作班四人、計十七人が記されているが、測量隊の尾形賢次と地図製作班の渡部慎は同一人物であり、実人数は十六人である。そのうちの坂部惟道は五島で殉職し、市野、柴山、青木、今泉、坂部（弘道）、尾形賢次（渡部慎）は転退出したため、最終的に地図完成に関与したのは九人であったという。なお青木勝雄は『江戸日記』では長期にわたって地図製作に従事しているが、測量隊員としてのみ紹介されている。ちなみに名簿筆頭の市野茂喬は、実際には短期間で測量隊を離脱して帰府したことは周知の通りである。

①【原文】『大日本沿海輿地全圖序』高橋景保

大日本沿海輿地全圖序

大凡使天下之形勢晰然如示諸掌莫明乎地圖使幅員廣狹之量遠近路程之度歷然可坐而數也又莫詳乎地圖而其明備詳悉非有術以測量之何足以辨毫釐乎夫測量之為舉非昇平之賜不能而微其人亦不能舉而行之亘古之所難而今亦不易也吾邦輿地全圖自古未備唯有長久保氏撰圖詳明可觀然恨不原諸測量之術毫釐無所

辨耳屬官伊能忠敬夙好曆算夢寐不置臣先人之蒙

微而東也忠敬即從學益極其精先人常患本邦地度之未有定測嘗建白之

官時適開撫蝦夷因使忠敬往焉遂有沿海測量之

命從事積年始知其確數先人檢較之蠻書所載果召合矣及闢以東之圖成而先人不

幸就木景保謹陳其事於圖端以上爾後幾二十年歷艱險凌波濤實履測驗聲教之所

登島嶼不遺始能告成於是撰修為大圖三十幅中國二幅小圖一幅附錄十四卷嗚呼

斯圖上應天度下盡地勢明備詳悉毫釐不差而與天地永懸而不墜於是乎昇平文明

之化可觀矣而微忠敬抑亦不可邪漢土五千年至清假手于西夷而後地圖始定則忠敬之功亦豈淺小乎哉

文政四年夏六月

御書物奉行兼天文方高橋景保謹識

【書き下し文】おおよそ天下の形勢をして晰然として諸（これ）を掌に示す如くせしむるは地図より明らかなるはなし。幅員広狭の量、遠近路程の度を以て、歴然として坐して数うべからしむるは又地図より詳しきはなし。而してその明備にして詳悉なるは、術ありて以て之を測量するに非ずんば何ぞ以て毫釐を辨ずるに足らんや。夫れ測量の挙たるや昇平の賜に非ずんば能はず。而してその人微かりせば、亦挙げて之を行うこと能はず。宜に古に難く、今も亦易からざる所なり。

吾が邦の地理全図、古より未だ備わらず。ただ長久保氏の撰図詳明にして観るべし。然れども恨むらくは諸れ測量の術に原（もとづ）かず。毫釐の辨ずる所なきのみ。属官伊能忠敬、夙に曆算を好み夢寐にも留ならず。臣の先人の微を蒙りて東するや、忠敬即ち從學し、益々その精を極む。先人、常に本邦の地度の未だ定測あらざるを患え、嘗て之を建白せり。官の時に適（たま）またま蝦夷を開撫せんとし、因りて忠敬をして往かしむ。遂に沿海測量の命あり。従事すること積年にして始めてその確数を知れり。先人、之を蛮書の所載と檢較するに、果して吻合せり。関以東の図なるに及んで、先人不幸にして就木せり。景保、謹んでその事を図端に陳べ、以て上る。爾後、幾んど二十年、艱險を歴え、波濤を凌ぎ、実履測驗、声教の暨ぶ所、島嶼も遺さず、始めて能く成るを告ぐ。是に於いて撰修して大図三十幅、中國二幅、小図一幅、附録十四卷となす。ああ斯の図、上は天度に応じ、下は地勢を尽し、明備にして詳悉なること、毫釐も差わずして天地と永く懸りて墜ちず。是に於いてか昇平文明の化、觀るべし。而して忠敬微かりせば、抑もまた可ならざりしか。漢土五千年、清に至りて手を西夷に仮りて後、地図始めて定まり。則ち忠敬の功、また豈淺小ならんや。

文政四年夏六月 御書物奉行兼天文方高橋景保謹識

【大意】おしなべて天下の地勢を明確に理解するには地図ほど分かり易いものはない。しかし、その地図は実測でないと不正確なものになる。そもそも測量は世の中が平和でなければ不可能であり、しかも適任者がいなければ実行できない。これが昔も今も測量が容易ではない理由である。我が国には古来、全国地図が無かった。長久保赤水が編纂した地図があるが、実測図ではないため不正確という欠点がある。私の部下、伊能忠敬は曆算を好み、寝る間も惜しんで精進していたが、私の亡父至時が幕命で出府するや門下に入つてその奥義を極めた。亡父は常々我が国の経緯度が未確定であることを憂いており、その測定を建言した。幕府はたまたま蝦夷地開拓を企図していたので忠敬を蝦夷地に派遣し、沿岸測量を命じた。何年かして緯度の正確な数値がわかり、亡父がこの数字を西洋の曆書と較べてみると、果せるかなびたりと一致した。『日本東半部沿海地図』の完成前に父至時は不幸にも死去し、私、景保はそのことをこの地図の端の序文に記して呈上した。以来二十年近く、困難を乗り越えて我が国の範囲内は島嶼も残らず実地測量して事業を完成し、大図三十幅、中國二幅、小図一幅、附録十四卷を作り上げた。この地図は天文にも地理にも対応して正確無比、天地と永久に一致する。これぞ平和な治世がもたらした文明開化である。しかし忠敬がいなかったら、そもそもこのことは不可能だったであらう。五千年の歴史をもつ中国ですら清代に至つて西洋人の手を借りてやつと地図を初めて確定することができた。それを思えば忠敬の功績は非常に深く大きいのである。

忠敬の功績は非常に深く大きいのである。

②【原文】『大日本沿海輿地全圖序』伊能忠敬

大日本沿海輿地全圖序

寛政十二年庚申夏

官以臣忠敬師高橋至時建白之故使忠敬測定地度會有開拓夷疆撫循殊俗之舉因連蠟夷而測之則徑三百里而遙地度可定矣忠敬乃起程于江戸歷奥州到蝦夷細測其驛路里程及東沿海輿極高度而還其冬即撰定地上一度之數并造自江戸至三廐驛路程圖及蝦夷東南海邊里程圖就至時

而奏上明年有坂東海邊測量之

命自是連年有

命以測定東海北陸及奥羽海邊文化元年甲子夏以東國沿海測量已完遂撰製地圖逮成至時既歿因就其子景保而上之九月六日經

御覽越十日

恩賜忠敬釋褐給俸重有西國沿海測量之命更使副以測量所吏於是益精儀器窮極

驗測十年卒業遂即撰製以為圖與前所上者合而觀之大凡六十八州之驛路沿海至四周島嶼無有遺漏更取間宮林藏所測參補夷地圖七更炎葛而始成名曰

大日本沿海輿地全圖共三通都三十三幅又採錄里程輿極高度以作輿地實測錄十有四卷并以上之蓋圖書之設所以周知地域之分界明廣袤之數度以備經國之用也故分州畫疆推表山川測之有術修之有法

而使其如視諸掌則可以知天下險夷通塞之處可以察土地向背炎涼之分也我

大日本國于瀛海中環以鯨波坤基所輿斜彌十度幅負既廣民物繁庶况今夷疆日闢盡歸版圖寰區之大於斯為盛圖書之日明且備理勢然也竊以古者嘗有風土記之設其所撰錄不能及圖書唯列疆土而不詳形勢之所在纔載山川亦不辨向背之所據特可以備典故而竟無裨經國焉中世以來天

下白句兵革相尋圖書有無誰能徵之慶元建業以來海內又率國各有圖籍之貢蓋無闕矣雖然忠敬嘗聞之地理之要專驗之於天象天度得正而後地勢可論故西夷之子能放舶于杏溟而週極大塊亦不過此術也已東方之言地理者大率不出於分率準望之外而竟無稽于天象是以迂直雖詳而向背之勢不正廣義雖著而距遠之度匪辨忠敬自從事於斯益研術理精造儀罷步其地

勢則心表之於山川推其距遠則心驗之於天度而後迂直之形向背之勢無復有乖則天下之形勢可舉以定焉忠敬不敏以僅嫻測量之術叨受重任自量非其才中心戰兢唯懼殞

恩命於是乎凌險踏危不顧勞勩勵誦劣之資奮驚駘之力庶幾效纖介之誠幸膺國家文明之運忠敬犬馬齒已過七十而得致涉萬里竟無壅塞乃此告成焉今所上全

圖於忠敬所過之處則極加詳悉至于各國郡邑山川之細則固未遑及也然樸斷既成丹璽當施况昇平之化之開物日精一日冀更命人補正焉則庶乎其集大成矣
文政四年夏六月 伊能忠敬謹識

【書き下し文】寛政十二年庚申夏、官、臣忠敬の師、高橋至時建白の故を以て忠敬をして地度を測定せしむ。会（たまたま）夷疆を開拓し、殊俗を撫循するの舉あり。因りて蝦夷を連ねて之を測れば則ち徑三百里にして遙かなり。地度定むべし。忠敬乃ち程を江戸に起し、奥州を経て蝦夷に到り、その驛路里程および東沿海と極高度とを細測して還る。その冬、即ち地上一度の数を撰定し、并に江戸より三廐驛に至る路程図および蝦夷東南海岸里程図を造り、至時に就きて之を奏上す。明年、坂海辺測量の命あり。是より連年命ありて、以て東海、北陸および奥羽海辺を測定す。文化元年甲子夏、東國沿海の測量已に完るを以て、遂に地図を撰製す。成るに逮び至時既に没す。因つて其の子景保に就きて之を上る。九月六日の御覽を経、越えて十日、忠敬に恩賜して褐を積き、俸を給う。重ねて西國沿海測量の命あり。更に測量所の吏を以て副けしむ。是に於いて益々儀器を精にし、極を窮め測を驗べること十年業を卒え、遂に即ち撰製して以て図と為す。前に上る所の者と合わせて之を觀れば、おおよそ六十八州の驛路、沿海、四周の島嶼に至るまで遺漏あることなし。更に間宮林藏の測せし所をとりて地図を參補し、七たび表裏を更えて始めて成る。名づけて曰く、大日本沿海輿地全圖と。共に三通都て三十三幅。また里程と極高度とを採録し、以て輿地實測錄十有四卷を作り、并せて以て之を上る。蓋し圖書の設えるは、地域の分界

を周知し、広表の数度を明らかにし、以て経国の用に備うる所以なり。故に州を分け、疆を画し、山川を推表す。之を測るに術あり、之を修むるに法あり。而して其をして諸を掌に視るが如くならしむれば、則ち以て天下の險夷、通塞の処を知り、以て土地の向背、炎涼の分を察すべきなり。我が大日本は、瀛海中に国し、環らずに鯨波を以てし、坤基の輿する所、斜め十度に弥り、幅員すでに広く、民物繁庶なり。況や今、夷疆日に闢け、尽く版図に帰す。寰区の大なること斯において盛となり、図書の日に明らかにして且つ備わるは理勢の然るところなり。竊に以えらく、古は嘗て風土記の設あるもその撰録するところは、図書に及ぶ能わず。ただ疆土を列して、形勢の所在を詳にせず。纔に山川を載せ、また向背の抛る所を辨ぜず。特に以て典故を備うべくして、竟に経国に裨するところなし。中世以来、天下匈匈として兵革相尋ぐ。図書の有無、誰か能く之を徴らかにせん。慶元建業以来、海内また寧かにして、国各々図籍の貢ありて蓋し闕くことなし。然りと雖も忠敬嘗て之を聞く。地理の要は専ら之を天象に驗し、天度の正しきを得てのち地勢は論ずべしと。故に西夷の子、能く查渾に放舶して大塊を週極するも、またこの術に過ぎざるのみ。東方の言う地理は、おおむね分率準望の外に出ずして、竟に天象を稽べるることなし。これを以て迂直は詳なりと雖も、向背の勢は正しからず。広表は著しと雖も、距離の度は辨ずること叵し。忠敬斯に従事してより、益々術理を研ぎ、儀器を精造す。其の地勢を歩めば則ち必ず之を山川に表し、其の距離を推れば則ち必ず之を天度に驗す。而して後は迂直の形、向背の勢、また乖くことあるなし。則ち天下の形勢、挙げて以て定むべし。忠敬不敏にして僅かに測量の術を嫻うを以て、叨に重任を受く。自らその才に非ざるを量り中心戰兢、ただ恩命を殞すを懼る。

是において險を凌ぎ危を踏み、勞勩を顧みず、謏劣の資を励まし、驚駭の力を奮い、纖介の誠を效せんと庶幾う。幸にして国家文明の運に膺り、忠敬犬馬の齒(よわい)已に七十を過ぎて、万里を跋涉するを得て竟に壅塞なく、乃ち此に成るを告ぐ。今、上る所の全図は、忠敬の之を過ぎる所の処は則ち極めて詳悉を加うれども各国郡邑山川の細に至りては、則ち固より未だ及ぶ違あらざるなり。然れども樸劉既に成り、丹牒当に施さんとす。況や昇平の化の物の開くこと日は一日より精し。冀くは更に人に命じ焉を補正し、則ち其の集大成に庶づかんことを。文政四年夏六月 伊能忠敬謹識

【大意】寛政十二年庚申夏、幕府は私の師・高橋至時の意見具申に基づき私忠敬に緯度を測定させた。当時幕府は蝦夷地を開拓しようとしていた。蝦夷地まで三百里と長距離なので緯度を確定しようというので私は江戸から奥州を経て蝦夷地に至り、街道の距離と本州東海岸の緯度を細測して帰った。その年の冬、緯度一度の距離を定め、江戸から三厩までの路程図と蝦夷地の東南沿岸部の里程図を作り至時を通じて呈上した。翌年、関東沿岸部測量の命が下り、以後、毎年下命があつて東海・北陸および奥羽沿岸を測量した。文化元年の夏に東日本沿岸の測量が完了し地図を作製した。完成時には至時はすでに亡く、景保を通して地図を呈上した。九月六日の上覧の翌十日、忠敬は幕吏として登用、重ねて西国沿海測量の下命があり、司天台の役人が配属された。測量機器をさらに精密にし、極限まで追求して観測し十年で事業をおえて地図を仕立てた。以前に上呈した地図と併せ、およそ六十八州の駅路、沿海、四周の島嶼を掲載、さらに間宮林蔵が測量した数値で地図を参補し、

七年かかって完成、『大日本沿海輿地全図』という。三種類、計三十三幅。里数と緯度を記録した『沿海実測録』十四巻を併せて上呈した。思うに、地図を整備するのは地域の境界を周知し、面積を明示して国家経営に役立てるためである。故に州を分け、境界を定め、山川を表す。そのために測量術、測量法があり、地形や行路、気候なども表現できる。我が大日本は海に囲まれ国土は斜め十度に連なり、土地は幅広く、人民も物資も多い。昨今は蝦夷地が開けて悉く我が国の領土となった。わが国は今まさに盛大であり、地図の整備は当然の理である。古代には『風土記』が整備されていたが、地図には及ばない。国境、領土の羅列で地勢については不詳であり国家経営には役立たない。中世以来、天下は戦乱続きだったが、慶長・元和年間に世が治まり国々から絵図が上納されるようになった。しかし私は地理には正確な緯度経度が重要だと聞く。西洋人が地球を周回できるのもこの技術によるのである。東洋の地理は量地のみで天測がないので不正確である。私は測量に従事して以降、技術をみがき、機器類も改良した。実地踏査して地形を描き、距離は必ず緯度と照合して實際と乖離することなく地勢を定めた。私は非才の身で測量技術で重責を担うこととなったが、有難い仰せに背かぬよう精一杯の努力をした。幸い文明開化の機運に遭い、七十歳を過ぎて諸国を歩き地図を完成することができた。今、呈上する地図は実測によつて極めて詳細には作ったものだが、細部にはまだ不十分な点もある。しかし世は日進月歩であり、しかももう時間がないのである。願わくば、更にこの地図の補正が命じられて、少しでも集大成に近づくことを望んでいる。

③【原文】『大日本沿海輿地全圖凡例』伊能忠敬

大日本沿海輿地全圖凡例

一往年奉

命測量沿海輿地大凡率土之濱莫地不履其所經測畫定成圖今之所造分大中小三通大圖以曲尺三寸六分爲一里中圖六分小圖三分以爲準率

一大圖自國郡村里之名及官邑米地侯國之別共他至山川嶋嶼宮祠寺觀其所經涉載而莫遺中圖唯記國郡村里之名如宮祠寺觀狹隘難記則

省其名而標符號至嶋嶼之繁不可悉載其名間亦有畧之者小圖則國郡通邑顯村之外多屬省畧及測路參錯嶋嶼繁密其難圖者亦畧焉

一大圖追米線屈曲而知里程之遠近至于中小二圖則屈曲開其詳悉故唯求直徑而已

一求直徑法不論大小得自果到果分寸以各一里率約之知其地遠若干

一測量之法定高山嶋嶼之方處以爲標的地移則標位移故隨其屈直之勢數用方位盤測之註以

某支幾分而其寓之圖上亦然則望線錯綜不可悉載故今標揭其要線以爲總括但大圖裁截分幅不可以施故載諸中小二圖

一圖上米以起線路者用量程車及度繩所測但自仙臺到南部野邊地特是步測也已

一蝦夷地方測量未完備故今取間宮林藏所測以參稱之

一加山川村落橋梁田園林禁則唯圖其形勢耳不必區別大小分寸方位也

一遠近向背測其距離者亦以定經緯爲要若南北緯度雖測極高而定之驗諸地上最難矣古之所以未得詳悉於是乎享味年來精微儀器觀覈地勢連年測驗積久始獲其確數則南北一度定爲二十八里二分施之于大圖上當一丈一寸五分二厘中圖六分之小圖十二分之至東西經度則以京師定爲中度東西數起而其度隨居地而不同如北極出地三十五度則東西一度爲二十三里一分四十度地二十一里六分四十四度地二

十里二分八厘五毫施之于大圖上三十五度地一度當八尺三寸一分六厘四十度地七尺七寸七分七厘四十四度地七尺三寸三厘中小二圖各約分得之今其逐度逐分算而畫之從南距北漸成線而各地方位度數皆自此線生實爲緊要但大圖距度廣寬裁而分幅故經緯度線皆難以施亦特載諸中小二圖

一各圖海岸嶋嶼若懸崖絕壁洪濤噴激無路可攀舟將齋粉則自數處望測而定之今以其非實測也開米路而別之及磯灣大河等間離米路者亦皆倣此

一嶋嶼之星集及典李地懸隔者率屬遠測且如與州松嶋唯定有勝名者位置已非映到而正之也

一圖上異米分之若山岳草木翠綠河海湖水藍青田園遠霞般色砂地濱涯黃色其他用符號者專取簡易且要便于覽也例如左

城 郡 國界 郡界

津屋 驛 社

△ 寺 港 測路 ☆ 極度測地

一附錄記里程之例自江戸日本橋數起到各驛或二分路註其相距若干若海邊則註至港口或顯村之距里

一嶋嶼之險能到而測之爲實測遠望而測之爲遠測測路之傍有城邑驛亭街衢坦直可平視者遠望而測之爲汎測海岸岬境橫絕其中距而測之爲徑測

一測路之傍有城邑寺社勝地雖過而到之或宿止

而測星度或橫絕而測中距也三町以內皆畧焉一宿所寺社及橫絕之地在三町以外而其無細名者假以濱或道令等字係之

一湖沼池澤實測者註其名稱里程唯望知其形狀者畧之

伊能忠敬謹誌

【大意】一、先年、幕命によつて沿岸を測量した。およそ海浜で実踏しなかつた土地はない。測量した所は地図を画いて確定した。このたび作成した地図は大・中・小の三種類で、大図は曲尺三寸六分を以て一里とし、中図は六分、小図は三分を以て一里とする縮尺割合とした。

一、大図は国名、郡名、村名をはじめ天領、知行所、諸侯の領地の区別、山川、島嶼、社寺で測量した所は全て掲載した。中図は国名、郡名、村名のみ記し、社寺等は符号で表した。島嶼の名は省略したものもある。小図は国、郡、都会、著名な

村以外は省略した。測量経路や島嶼の煩雑な箇所も省略した。

一、大図は朱線の屈曲で距離が分かる。中・小図は屈曲を簡略にしたので直線距離だけが分かる。

一、直線距離を知る方法にはある地点からある地点までの寸法を各一里の縮尺比率で割ればよい。

一、測量の方法は高山や島を標的とし、曲直に随って方位盤で測り、方位線を地図に記載した。

一、図上の朱線は量程車や間縄で測った所である。但し仙台から野辺地までは歩測のみである。

一、蝦夷地は測量が未完につき間宮林蔵が測量した数値を交え採用して未完の部分を補った。

一、山川、村落、橋梁、田園、林などはその形を図にただで正確ではない。

一、距離を測るには経緯度の測定が肝要である。天測して緯度を出す、地上の緯度一度の距離は難しい。享和年間以来、観測機器を精密にし、地形を調べ、毎年天測してデータを積むこと久しくして初めてその確実な数値を得た。つまり緯度一度の距離は二十八里二分と算定した。これは大図上では一丈一寸五分二厘に当たる。経度は京都を基準とし、その一度の長さは緯度によつて異なる。緯度三十五度の地では二十三里一分、地図上では八尺三寸一分六厘となる。経緯度線は大図には書き難いので中・小図にのみ書く。

一、海岸、島嶼で測量が困難な所は望測である。実測でない部分は朱色の測線を引いていない。

一、島が多く集まり、または陸地から隔絶している場合はおおむね遠測によつた。

一、省略（地図上の彩色と記号について）

一、附録として記載した里程の例は、江戸日本橋を起点とした。（以下略）

④【原文】『高橋景保又誌』高橋景保

文化元年甲子之冬有

命使測量所吏副之市野茂喬坂部惟道下河邊與方柴山正弼青木勝雄永井充房今泉直利門谷常久坂部弘道及忠敬弟子尾形賢次箱田真與保木永譽平野季恭凡十有三人皆與踏艱險而有功其與此撰者更有川口春興渡部慎吉川景武岡田道正四人拮据之勞歲月之久或死于後或以病免而今與方充房常久春興景武道正及真與

永譽季恭相與戮力以畢其功云

高橋景保又誌

【書き下し文】文化元年甲子之冬、命有りて測量所の吏をして之に副えしむ。市野茂喬、坂部惟道、下河邊與方、柴山正弼、青木勝雄、永井充房、今泉直利、門谷常久、坂部弘道、及び忠敬弟子、尾形賢次、箱田真與、保木永譽、平野季恭、凡そ十有三人、皆與（とも）に艱險を踏みて功有り。其れ此の撰に與りし者、更に川口春興、渡部慎、吉川景武、岡田道正、四人有り。拮据の勞、歲月の久しきに、或いは役に死に、或いは病を以て免じ、今、與方、充房、常久、春興、景武、道正及び真與、永譽、季恭、相與に力を戮（あわ）せ、以てその功を畢（おわ）ると云う。

高橋景保又誌

【大意】文化元年甲子の冬、命令により測量所の役人を配属して測量事業を輔佐させた。市野茂喬、坂部惟道、下河邊與方、柴山正弼、青木勝雄、永井充房、今泉直利、門谷常久、坂部弘道、及び忠敬の門人である尾形賢次、箱田真與、保木永譽、平野季恭のおよそ十三人である。皆ともに困難を乗り越えて測量を実行し、功績があつた。そのほか地図作成に関与した者として更に川口春興、渡部慎、吉川景武、岡田道正、の四人がいる。体をかがめて地図作りに苦労した。長い歲月の中、ある者は殉職し、ある者は病気で退職し、現在、下河邊與方、永井充房、門谷常久、川口春興、吉川景武、岡田道正及び箱田真與、保木永譽、平野（※平山）季恭がお互いに力を合わせて、地図作成の事業を終了させたという。

（了）

【参考文献】

- 『伊能忠敬』 大谷亮吉 岩波書店
 『伊能忠敬の科学的業績』 保柳睦美 古今書院
 『伊能忠敬の地図をよむ』 改訂版 渡辺・鈴木
 『伊能忠敬 江戸日記』 伊能忠敬研究会
 『伊能忠敬研究』第34号 佐久間達夫 〃
 『伊能忠敬研究』第58号 鈴木純子 〃
 『伊能忠敬研究』第62号 鈴木純子 〃
 『江戸幕府編纂物』 福井保 雄松堂

伊能忠敬史跡めぐり

深川の法乗院

玉造 功

はじめに

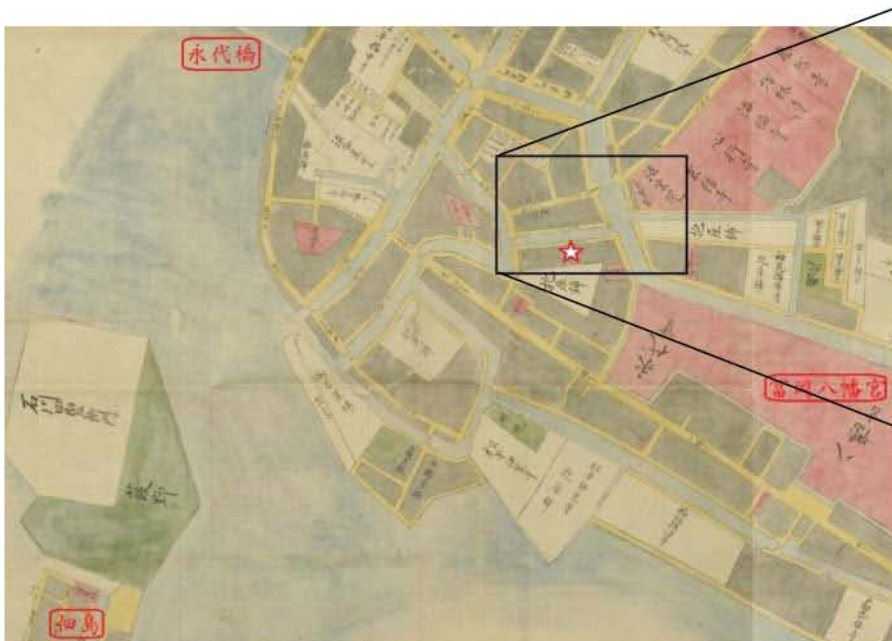
伊能忠敬翁没後二〇〇年ということで、浅草源空寺の忠敬の墓所に行かれた方も多いかと思う。源空寺については会報でも度々触れられているが、本稿では、あまり触れられないことのない、伊能家の江戸における菩提寺である深川の法乗院について紹介したい。

伊能家の菩提寺

忠敬が第十代当主を務めた伊能三郎右衛門家（以下、伊能家と略す）代々の菩提寺は、香取市牧野の妙光山蓮華院観福寺①である。

寛平二年（八九〇年）に開基された真言宗豊山派の古刹であり、中世にあつては千葉氏の武士団の信仰を集め、近世には地方の檀林（僧侶養成のための学問所）としての役割を果たし、また伊能家から住職を勤めた者も出るほど、伊能家の厚い帰依をうけてきた。

忠敬もまた観福寺に対して、手厚く対応している。伊能家の小網町の店で養子盛右衛門と暮らす娘のイネなどに宛てた忠敬の手紙②では、治療のため出府した観福寺の住職の世話を事細かに指示している。宿泊先は日本橋茅場町あたりで、内雪隠、湯殿のあるものを借り、米、塩、味噌、薪などの世話や食事の手配についても気配りしている。



「佃島深川八幡洲崎辺迄 寛保延享ノ頃」 ③

旧幕引継書

「寛保延享ノ頃 江戸絵図 十四枚之内」

国立国会図書館デジタルコレクションに加筆

町人地は灰色、寺社は赤、武家地は白で塗り分けている

江戸の伊能家

ところで、伊能家では第七代当主の昌雄のように、さつさと隠居して日本橋村松町に隠宅をかまえ、龍笛・能楽・茶・俳諧など風雅三昧の生活をおくる者もいた。また、盛右衛門・イネ夫婦のように伊能家の江戸店を任されて、江戸で生活する者もいた。

江戸時代の檀家制度のもとでは、家単位で寺院（菩提寺・旦那寺）の檀家として登録され、人別帳への登録・婚姻・転居などにあたっては、菩提寺からその檀家であつてキリシタンではないことを証明してもらうこと（寺請制度）が必要であつた。

伊能家の者が佐原から江戸に居住地を移すと、佐原の村役人から江戸の町役人へ村送一札（村送状）が送られる。そこには本人の名前・年齢・続柄・転出理由などとともに、菩提寺による檀家証明（寺送一札、寺送状）が不可欠であつた。これにより、転居先の同じ宗派の寺院の檀家となり、人別帳に書き加えられた。

このようにして、江戸で生活する伊能家の人々は、佐原の観福寺と同じ真言宗豊山派である深川の法乗院の檀家となったのである。

江戸に住む伊能家の者が亡くなることもある。そういう場合にはどうするのか。

寛保三年（一七四三年）六月十六日に、第七代当主の伊能昌雄が江戸村松町の隠宅で死去した。十八日には、深川の法乗院で仮葬の法事をおこない、砂村で火葬にした。十九日に収骨して、直ちに江戸表を出立した。二十日には佐原に到着し、観福寺で葬儀を行なっている④。

忠敬と法乗院

『伊能忠敬江戸日記』から法乗院関係の記事を拾い上げてみよう。

- ・文化十一年七月十四日
「法乗院へ南鑑(二朱銀)一片差遣す。名代を以て廟参」
- ・文化十一年九月十三日
「平服にて法乗院、会田三左衛門、津軽侯御屋鋪へ罷越」
- ・文化十一年十二月十一日
「法乗院寒氣見廻の為来る」
- ・文化十二年一月二十二日
「深川八幡宮並法乗院：年始参り」
- ・文化十二年七月十四日
「深川寺へ参詣、三治郎(嫡孫、後の忠誨)同道」
- ・文化十三年七月十四日
「深川法清(乗)院へ参詣」
- ・文化十四年七月十四日
「深川法清(乗)院へ参詣」

このように忠敬はお盆には欠かさず法乗院に参詣している。ただし、日記に法乗院についての記載があるのは、文化十一年六月三日に八丁堀の亀島町へ転居してからのことであり、黒江町時代には記載されていない。

前ページの地図でわかるように、黒江町の忠敬の隠宅は富岡八幡宮よりも法乗院の近くに位置していた。黒江町時代の忠敬にとって、ご近所の菩提寺にお参りすることは、日記に記する程の事では無かったであろう。

忠敬の死

高橋至時の次男である渋川助左衛門景佑が関わった『伊能翁行状』⑤では、忠敬の死について次のように記している。

「哀かな、文政元年四月十三日、天年(天寿のこと)を以て八丁堀亀島の宅に没す。享年七十四。浅草源空寺、東岡先生の墓碣の左傍に葬る。然共、事未だ成らざるを以て、歿すことを官に達せず」

地図御用を遅滞なく継続するために、公には喪を伏せた。その一方で、伊能家としては内々に葬らねばならない。忠敬の「遺囑」⑥により、江戸における伊能家菩提寺の深川法乗院ではなく、浅草源空寺の高橋至時の墓の傍ら⑦に葬られた。そのため、文政元年六月には源空寺から有功院成祐種徳居士(忠敬の戒名)の永代供養料三両の請取が出されている⑧。



大谷亮吉『伊能忠敬』(大正6年発行)の口絵写真

口絵写真中央の小型の墓碑は、妙薫と忠誨がお参りした忠敬の仮墓であろうか。

忠敬の嫡孫忠誨の日記には、忠敬の月命日になると「予ト伯母源空寺エ行ク」という記事を見ることが出来る。

忠敬の死の公表

さて、文政四年七月十日に『大日本沿海輿地全図』及び『大日本沿海実測録』が完成し上呈されると、忠敬の死の公表に向けて手続きが始まる。

・文政四年八月「兼々奉申上置候心願之趣申上候書付」⑨を提出。

「当春以来、さしおこ痰咳差発り、相勝れ申さず候」、

「快気仕るべき躰御座無く候」という病状報告と跡目についての要望からなる文書で、忠敬の名前で所属小普請組の組頭渋江新之助に提出されている。

・同年九月「奉願候覚」⑩を提出。同じく忠敬の名前で渋江新之助に宛てた文書である。

「此節絶食に罷り成り」と病状悪化を報告し、「相果て候節」には心願の通りにして欲しいと要望している。

・九月四日「伊能勘解由病死届」⑪を提出。

「養生相叶わず、今四日未之中刻、死去仕り候」という死亡届が佐原村長百姓伊能三郎右衛門(忠誨)と下河辺政五郎の名前で提出された。

・同日「祖父病死に付忌服請届」⑫を提出。伊能三郎右衛門(忠誨)が服忌令に基づいて、忌三十日、服百五十日を届けた。

現代の我々から見ると、忠敬が生きているかの如くに肅々と手続きが進み、死亡届に至る有様は異様に思える。しかし、幕臣の世界では、死亡届を故意に遅らせることがあり、三年程度は黙認されていたという^⑬。当時としては特段珍しいことではなかったのかも知れない。

法乗院と源空寺

忠敬の死が公表される少し前の文政四年八月に、法乗院から『送一札之事』^⑭が源空寺に宛てて出された。忠敬は内々の了解のもとで伊能家の菩提寺ではない源空寺に葬られていたが、法乗院は真言宗、源空寺は浄土宗であるため、ここで正式な書類手続きが行なわれることになった。『送一札之事』の書き下し文は次の通りである。

送一札の事

一、八町堀伊能勘解由儀、拙寺檀家に御座候処、此度は別段願に付、貴寺へ葬式相送り候間、御寺法の通り御取置き成さるべく候。念の為寺送り一札、依つて件の如し

文政四巳年八月

浅草

源空寺様

真言宗法乗院印

深川寺町

注意すべきは、この文書は伊能家と法乗院の間のいわゆる縁切り状を意味するものではない点である。別段の願いによって、特例として、

伊能勘解由個人の葬祭を他宗派の寺院が行なうことを認めたのであって、江戸に住む伊能家の人々の菩提寺は相変わらず法乗院であった。『送一札之事』と同じ八月に法乗院は「伊能勘解由親類衆中」に宛てて『月牌（がつぱい）証帖』^⑮という請取証を出している。「月牌」とは月命日に供養してもらうことをいう。

月牌証帖

一金拾五両也

右者伊能勘解由殿死去之後生

永代月牌金御納被成候間備

霊供毎月御回向後と住至迄

無怠慢者也

文政四巳年八月

深川寺町

法乗院（印）

現住心興（花押）

伊能勘解由

御親類衆中

この文書は、伊能家親戚一同が法乗院に納めた金十五両について、伊能勘解由殿死去の後生のために、永代月牌金を納められたので、霊供を備え、毎月御回向いたします。後々の住職に至るまで、怠ることはありませんという内容である。

伊能家としては、忠敬の「遺囑」を尊重して文政元年六月に源空寺に供養を願い（『月牌糧請取』）、その一方で、江戸での伊能家の菩提寺は法乗院に変わりがないので、忠敬の月命日

には供養して貰う（『月牌証帖』）ことにした。佐原の観福寺の伊能三郎右衛門家の墓地にも忠敬の墓がつくられ供養が行なわれたのは言うまでも無い。

忠敬の娘の妙薫（イネの出家名）が亀島町で亡くなったのは文政五年八月二十四日である。

『伊能忠誨日記』によると、保木敬蔵が所々へ知らせの書状を、佐原へは飛脚を出した。

・二十五日「法乗院エ行キマツ、御経始ル」

・二十六日 砂村で火葬

・九月一日 亀島町を出立

・九月二日 佐原本家に到着

・九月三日「骨ヲ観福寺へ持参、予、ノシ目上下ニテ行ク。御経シバラクアリ、ホウムル」

妙薫も大伯父の昌雄と同様に法乗院で仮葬し、佐原にもどつて本葬をおこなった。

妙薫は忠誨の墓の隣に甥の鉄之助と共に眠っている（左写真）。戒名は「楞嚴院體常妙實大姉」である。



江戸時代の法乗院

法乗院は、関東大震災と戦災に遭ったため、古いものは残っていないとのことである。しかし幸いにも、法乗院が幕府に提出した「起立帳」が現存しており、江戸時代の法乗院について知ることが出来る。文政四年の「送一札之事」や「月牌証帖」の七年後にあたる文政十一年八月二十七日の日付で提出された。

江戸幕府が江戸の各町々と寺社に由来や現況を書上げさせたものが『町方書上』と『寺社書上』である。法乗院が提出した「起立帳」は『深川寺社書上五』に収められており、国立国会図書館デジタルコレクションで閲覧することが出来る。

「起立帳」は、法乗院の所在地、本末関係、宗派、山号に始まり、境内や本堂の規模、棟札の全文、本尊を初めとする諸仏の詳細、鐘や額のサイズと銘文等々詳細に報告している。その最後に報告責任者が署名捺印している。「十八世現住(現住職)心興」がそれである。文政四年



「起立帳」 国立国会図書館デジタルコレクション

に伊能勘解由親類衆中宛ての『月牌証帖』に署名した心興と同一人物である。

なお、「起立帳」には閻魔堂も記載されており、閻魔王は運慶作としている。この閻魔王の木像は関東大震災で焼失したという。



「起立帳」 国立国会図書館デジタルコレクション

国会図書館の蔵書に志田慈道著『法乗院略縁起』があり、左の写真が掲載されている。奥付には大正元年十二月三十一日発行とあるので、焼失以前の閻魔大王像の可能性が高い。



(作慶雲) 王大魔國

法乗院の閻魔堂は江戸三大閻魔として深川ゑんま堂の名で親しまれ、多くの参拝客を集めていた。とりわけ、この閻魔堂近くの富岡橋は河竹黙阿弥の『髪結新三』の名場面の舞台として有名になった。「深川閻魔堂橋の場」の

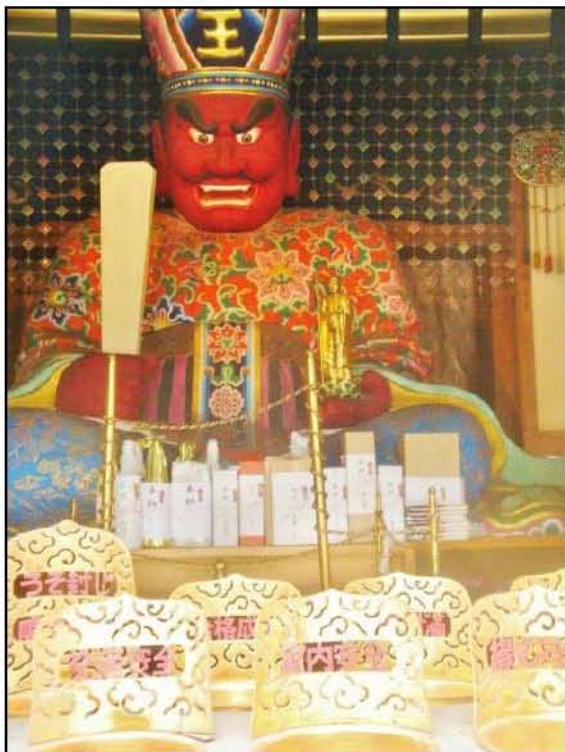
丁度所も寺町に、娑婆と冥土の分かれ道、その身の罪も深川に、橋の名さえも閻魔堂という名セリフである。

ただし現在は川が埋め立てられ、頭上を高速道路が覆っており、昔の面影は無い。

現在の法乗院

現在の法乗院でも本堂左側の深川ゑんま堂が人気のパワースポットになっている。金の冠のような賽銭投入口は「家内安全」「交通安全」などの願い事ごとに十九もある。「怨敵退散」「ぼけ封じ」もあり選択に迷う。賽銭を入れてみると、全高三・五m、全幅四・五m、重量一・五tという日本最大の極彩色の閻魔大王(左写真)に、照明がチカチカと点滅し始めた。BGMとともに、閻魔様の有り難いお言葉が流れてきた。賽銭を入れる場所によって音響や説法が変わるといふ。今やインスタ映えする深川ハイテク閻魔さまとして有名なのだそうである。

深川の富岡八幡宮や黒江町旧宅跡を訪れる際には、もう一つの忠敬ゆかりの場所である法乗院へ是非どうぞ。



【注】

① 観福寺については、伊能楯雄「伊能忠敬史跡めぐり 伊能三郎右衛門家墓地」（『伊能忠敬研究』第六八号）を参照されたい。

② 香取市伊能忠敬記念館所蔵

国宝 書状類第一六九

『伊能忠敬未公開書簡集』三七頁

安藤由紀子「お信さん」

（「伊能忠敬研究」第一五号所収）

③ 『伊能忠敬研究』第一五号所収
は、明治新政府が徳川幕府から引き継いだ『寛保延享之頃 江戸絵図 十四枚之内』の内の一つで、「旧幕引継書」「御普請方沿革調」の印記がある。

国立国会図書館デジタルコレクション



④ 伊能淳家文書の『傳家』は、佐原文書学習会が解説を進めており、その成果を『伊能忠敬記念館年報』第一九号から掲載を始めた。内容は元文四年から寛政五年までの伊能家を軸とした佐原村の村政記録である。

⑤ 保柳睦美編著『伊能忠敬の科学的業績』

⑥ 渋川景佑草稿『東河伊能翁伝』（『伊能忠敬の科学的業績』所収）に「葬於城北下谷源空寺、東岡先生之塋域。従遺囑也。」とある。

大意は、城北の下谷源空寺にある高橋至時先生の墓域に葬った。これは忠敬翁の遺囑によるものである。

⑦ 『伊能忠誨日記』によると、佐藤一斎の碑

文を刻んだ墓石が完成し源空寺に建立されたのは文政六年四月十四日である。それまでの間、忠敬は源空寺のどこに葬られていたのだろうか。墓石や墓標はあったのだろうか。やはり、永野達代「源空寺に忠敬墓は二基あった」（『伊能忠敬研究』第二七号）の記事が気にかかる。

⑧ 『月牌糧請取』：『世田谷伊能家伝存

伊能忠敬関係文書目録』九一頁―一四三

⑨ 香取市伊能忠敬記念館所蔵

国宝 文書・記録類第三七八

伊能陽子「源空寺墓碑建立始末(1)」

（「伊能忠敬研究」第十号）

⑩ 香取市伊能忠敬記念館所蔵

国宝 文書・記録類第三八四

伊能忠敬関係文書目録』七四頁―一〇三三

⑪ 香取市伊能忠敬記念館所蔵

国宝 文書・記録類第三八一

伊能陽子「源空寺墓碑建立始末(2)」

（「伊能忠敬研究」第十一号）

⑫ 香取市伊能忠敬記念館所蔵

国宝 文書・記録類第三八六

伊能陽子「源空寺墓碑建立始末(2)」

（「伊能忠敬研究」第十一号）

⑬ 小川恭一『江戸の旗本事典』

⑭ 香取市伊能忠敬記念館所蔵

国宝 文書・記録類第三八〇

伊能陽子「源空寺墓碑建立始末(1)」

（「伊能忠敬研究」第十号）

⑮ 香取市伊能忠敬記念館所蔵

国宝 文書・記録類第三七九

法乗院

深川ゑんま堂



資料

「伊能忠敬測量隊の足跡をたどる」連載第二十回

伊能忠敬銅像報告書「伊能忠敬の足跡」の改訂増補版

【第八次測量】

(九州第二次)

小倉城下く伊万里町

自 文化9年7月15日 至 文化9年9月10日

22			21		20		19		18		17	16	15		文化9年7月	宿泊日・旧暦			
(28)	先手昼休	後手中食	(27)	中食	(26)	坂部	(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	支隊昼休	(1812)	(西暦)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
若松村	修多羅村字石橋	二嶋村	黒崎宿	戸畑村	同	小倉城下	(監島)	同	同	同	小倉城下	徳力宿				福岡県 北九州市小倉南区	庄屋勘左衛門	無測	一七八
同北九州市若松区	同北九州市若松区	同北九州市若松区	同北九州市八幡西区	同北九州市戸畑区	同	同北九州市小倉北区	同北九州市小倉北区	同	同	同	同北九州市小倉北区	宮崎良助						本隊は小倉逗留して月食測量の支度。恒星測定	一七八
本陣庄屋庄五郎 太治郎 平治郎	福岡候大阪積米倉会所 家番喜作	庄屋庄九郎	本陣八幡屋庄治郎 関屋孫七 綿屋七蔵	庄屋喜平治	同	宮崎良助	本陣百姓八左衛門 太十郎 五左衛門	同	同	同	同	宮崎良助						月食の測を調べ書。恒星測定	一七八
二嶋より藤木村、修多羅村字石橋を歴て若松村まで測る。二子嶋を測。恒星測定	二嶋より藤木村、修多羅村字石橋を歴て若松村まで測る。二子嶋を測。恒星測定	二嶋より藤木村、修多羅村字石橋を歴て若松村まで測る。二子嶋を測。恒星測定	黒崎宿海辺藤田村字五反より熊手村、本城村、鴨生田橋を歴て二嶋まで測る。	中嶋、カツラ嶋、鼠嶋を測、戸畑村より枝光村字中臣を歴て尾倉村字峠へ繋ぎ、藤田村字五反、秋月の蔵屋敷を歴て黒崎宿追分へ繋ぐ。恒星測定	豊前国中原村筑前国戸畑村界より戸畑村まで測る。	藍島出船。筑前国戸畑村豊前国中原村界より逆測。平松浦を歴て城下の制札に繋ぎ終る。江戸へ書状を出す。	月食稿、江戸書状を認。藍島、瀬戸島を測。	波高に付渡海相成らず逗留。測食稿を認。	月食の測を調べ書。恒星測定	月食を測る。	月食の測を調べ書。恒星測定	支度。恒星測定	本隊は小倉逗留して月食測量の支度。恒星測定	無測				月食の測を調べ書。恒星測定	一七八
一七八	一七八	一八六	一八六	一七八	一七八	一七八	一七七					一七八							

24		23 *			文化9年7月	宿泊日・旧暦
(30)	中食	【支隊】	(29)	本隊昼休	(1812)	(西暦)
芦屋浦	岩屋浦	小竹村脇ノ浦	山鹿浦	小敷村枝太閣水		宿泊地
同 芦屋町	同 芦屋町	同北九州市若松区	同 芦屋町			現・市町村名
本陣俵屋市右衛門 庄屋兵四郎 蟬会所庄五郎	庄屋半三郎	百姓宇右衛門 百姓平蔵	大庄屋秋枝勘治郎	茶屋但八		宿泊宅
当嶋、洞山嶋を測る。山鹿浦川口より芦屋浦渡川口、芦屋浦止宿入口を歴て川尻塩入を逆測、嶋津村、川中嶋なり、遠賀川分水を渡り、猪熊村木屋瀬道歴て浅川村、嶋の江渡口に繋ぐ。恒星測定	崎にて手分と合測。	小竹村脇ノ浦海辺より安屋村脇田浦、有毛村海辺を歴て岩屋浦に繋ぐ。有毛村海辺より妙見崎にて順逆合測。山鹿浦海岸より山鹿浦川口、岩屋浦を歴て妙見崎にて手分と合測。	若松村海辺より修多羅村字小田崎を歴て小竹村脇ノ浦海辺まで測る。	浅川村より嶋の郷に渡り、山鹿村字後水、魚町を歴て山鹿浦海岸まで測る。		特記・天体観測
一八六	一八六	一八六	一八六	一八六		大図番号

30 *		29 *		28 *		27 *		26		25		文化9年7月	宿泊日・旧暦
【支隊】	(5)	【支隊】	(4)	【支隊】	(3)	【支隊】	(2)	支隊昼休	(9 1)	本隊昼休	(3 1)	昼休	(西暦) (1812)
新宮浦		監島 監島村	津屋崎浦	大島 大島村	津屋崎浦	大島 大島村	勝浦村	地島 地島村	神湊村	田島村	鐘ヶ崎浦	原村波津浦	宿泊地
同	新宮町	同	同 福津市	同	同 福津市	同	同 福津市	同	同 宗像市	同	同 宗像市	同	現・市町村名
本陣浦大庄屋 金内新左衛門 庄屋九右衛門 酒造人久平		榎屋惣七 松屋善作	本陣佐治徳左衛門 瀬戸屋兵三郎	沖吉屋兵蔵 弥一郎	本陣佐治徳左衛門 瀬戸屋兵三郎	沖吉屋兵蔵 弥一郎	本陣大庄屋長島源五郎 庄屋半兵衛	庄屋八右衛門	本陣丸二屋兵右衛門 酒屋三之丞	宗像神社	本陣庄屋久五郎 医師植木道寿 赤間屋喜兵衛	庄屋平十郎	宿泊宅
浦に着。藍嶋、灯明堂前より山を左に一 周測る。測り終て乗船、神ノ宮		雨天逗留。	津屋崎浦より福岡浦、古賀村を 歴て花鶴川を渡り新宮浦海辺ま で測る。恒星測定	渡り村人家前より字勝山および 枝梅津を歴て(横切二箇所あ り)津屋崎村津屋崎浦まで測 る。	定	大島村浦本村字中西、瑞津宮前 より右山に測る。	神ノ湊海辺より四ツ塚岬を歴て (途中横切あり)勝浦浜、勝浦 村海辺より止宿へ打上。勝嶋を 測る。恒星測定	地嶋波戸嶋より山を左に一周測 る。	を過て田島村宗像神社まで測 る。恒星測定	鐘ヶ崎浦止宿下海辺より釣川を 渡り、神ノ湊海辺を歴て止宿前 を過て田島村宗像神社まで測 る。恒星測定	崎浦止宿まで測る。恒星測定	芦屋浦渡川口より芦屋村遠賀の 松原、手野村手野浜を歴て原村 波津浦まで測る。それより黒崎 岬郡界を過ぎ鐘ヶ崎を歴て鐘ヶ 崎浦止宿まで測る。恒星測定	特記・天体観測
一八六		一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	一八六	大図番号

3		2	1	宿泊日・旧暦 文化9年8月	(西暦) (1812)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(8)	先手小休	(7)	(9, 6)							
箱崎宿馬場町本町	多田羅村枝洲ノ崎	浜男村	志賀島 志賀島村							
同 福岡市東区	同 福岡市東区	同 福岡市東区	福岡県福岡市東区							
本陣治郎助 作次 市作	百姓次七	本陣吉蔵 春作 次平	本陣志賀神社 別当 臨濟宗金剛山吉祥寺 浦庄屋源四郎 庄屋惣助							
後手浜男村赤間街道より香椎村 堀川より香椎宮へ打上る。堀川 より松崎村海辺、名島村、川尻 口洲鼻を歴て多田羅橋に繋ぐ。 名島村より妙見嶋へ渡り一周 測。名島村箱崎村界より箱崎川 端松原を通、箱崎橋に繋ぎ終 る。先手松崎村海辺より福岡街 道を多田羅村枝洲ノ崎を歴て多 田羅川大橋渡り箱崎橋、箱崎宿 馬場町止宿前を歴て宮前町八幡 宮鳥居前、それより海辺石華表 を歴て箱崎村名島村界まで測 る。宮前町より八幡宮(箱崎 宮)楼門まで測る。恒星測定	後手新宮浦海辺より三苫村奈多 浦界を歴て名所海の中道突端、 志賀嶋村前内海、外海中まで測 る。先手三苫村奈多浦界より横 切奈多浦字宝塚を歴て海の中道 突端まで測る。それより志賀嶋 浦及び志賀嶋鳥居前を歴て止宿 に至る。恒星測定	後手志賀嶋鳥居前より左山に回 り馬場ノ浜にて両手合測。先手 志賀嶋浦より字金浜、委奴国王 の印出所を歴て枝勝間村馬場ノ 浜にて両手合測。それより乗 船。後手奈多浦字宝塚より下和 白村を経て下原村枝唐ノ原字片 才サ岬迄測る。先手浜男村より 逆測字片才サ岬にて両手合測。 恒星測定	後手志賀嶋鳥居前より左山に回 り馬場ノ浜にて両手合測。先手 志賀嶋浦より字金浜、委奴国王 の印出所を歴て枝勝間村馬場ノ 浜にて両手合測。それより乗 船。後手奈多浦字宝塚より下和 白村を経て下原村枝唐ノ原字片 才サ岬迄測る。先手浜男村より 逆測字片才サ岬にて両手合測。 恒星測定							
一八七	一八七	一八七	一八七							

7		6		5		4	文化9年8月	宿泊日・旧暦
(12)		(11)	支隊昼休	(10)	小休	(9)	(1812)	(西暦)
博多呉服町		博多呉服町	井相田村	博多呉服町	洲崎町上	博多呉服町		宿泊地
同 福岡市博多区		同 福岡市博多区	同 福岡市博多区	同 福岡市博多区	同 福岡市博多区	同 福岡市博多区		現・市町村名
領主客館 家番大賀善之丞		領主客館 家番大賀善之丞	茶屋権吉	領主客館 家番大賀善之丞	高橋屋与右衛門	領主客館 家番大賀善之丞		宿泊宅
同所逗留。博多橋口町中島橋手前より街道を中島町を歴て橋口北門これより福岡城下、万町、簀子町を経て通町門郭内外界門、鳥飼村内西新町を歴て海辺へ打下。それより海辺逆測、伊崎浦字荒津鼻海辺測量の節、当黒田家中長崎番交代諸士家との幟を立て帰船太鼓を打入津。湊町を歴て中川尻波戸に至、博多鰯町に繋ぐ。江戸用状届く。		半周測。恒星測定	住吉村中川端より中川渡り中島追分より豊後日田街道を板附村を歴て井相田村追分まで測る。	同所逗留、市中を測る。呉服町追分より測所を歴て臨濟宗聖福寺、万承山承天寺を測。呉服町追分より豊後日田街道を板附村を歴て井相田村追分まで測る。	同所逗留。箱崎宿宮前町より街道を堅粕村を歴て石堂橋を渡りそれより博多官内町内呉服町山家街道追分を経て洲崎町上に小休、博多織を見て橋口町中島橋手前に繋ぐ。それより櫛田宮及び住吉村中川端を歴て住吉神社へ打上。恒星測定。江戸書状届。	箱崎村浜辺より博多海辺鰯町を歴て中島橋手前制札前まで測る。領主より一同へ贈物あり。恒星測定		特記・天体観測
一八七		一八七	一八七	一八七	一八七	一八七		大図番号

10 *				9	8	宿泊日・旧暦 文化9年8月
【支隊】	(15)	本隊昼休	本隊小休	(14)	(13)	(西暦) (1812)
今津村	前原宿	前原宿	志登村	谷村枝今宿松原町	姪浜宿	宿泊地
同 福岡市西区	同 糸島市	同 糸島市	同 糸島市	同 福岡市西区	同 福岡市西区	現・市町村名
庄屋三右衛門 百姓喜平治	本陣茶屋作右衛門 綿屋藤七	本陣茶屋作右衛門	庄屋丈助	本陣酒造屋長三 治郎吉 瓦屋和七	本陣金住屋利吉 庄屋長左衛門 油屋与右衛門	宿泊宅
浜崎浦字洲先より洲鼻を測る。 入江口より外海測量、今津村字 野間を歴て松原を横切り内海に 出、入江口に繋ぐ。今津村字十 王堂前入江口より太郎丸川を渡 り今津村横切残し印に繋ぐ。	波多江村より前原村前原駅次を 歴て前原止宿にて昼休、それよ り多久川中央、福岡藩志摩郡荻 浦村中津領怡土郡神木村界まで 測る。それより海辺へ打下げ字 井樋堰、新開堤角を歴て泉川尻 渡まで測り、新開堤角より泉川 縁打上、前原村泉川土橋前まで 測る。恒星測定	支隊、鳥飼村内西新町浦海辺よ り早良川二流を渡り姪ヶ浜村字 恵比須浜を歴て街道横切、字久 保町を経て字魚町街道に繋ぐ。 恵比須浜より奈柄川を渡り字久 保町に繋ぐ。奈柄川より小戸山 鼻両手合測。本隊、鳥飼村内西 新町より魚原村内西新町追分を 歴て藤崎川、早良川室見橋を渡 り姪浜宿丹過町を経て下山門村 生の松原街道打留。それより海 辺へ横切姪浜村字妙見崎両手合 測。	姪ノ浜より乗船、残島測。忠 敬、坂部は直に今宿へ行。下山 門村海辺より青木村字長垂鼻、 谷村枝今宿字松原を歴て今津村 字十王堂浜まで測る。今宿字松 原海辺より街道打上。恒星測定	谷村枝今宿松原町より今宿本町 駅場、周船寺村、波多江村を歴 て志登神社まで測る。	特記・天体観測	大図番号
一八七	一八九	一八七	一八七	一八七	一八七	

15	14	13 *		12 *		11 *			文化9年8月	宿泊日・旧暦
(20)	(19)	【支隊】	(18)	【支隊】	(17)	【支隊】	(16)	本隊小休	(1812)	(西暦)
深江駅	前原宿	野北浦	芥屋村	宮ノ浦	岐志浦	宮ノ浦	久家村	枝笹山字波戸場		宿泊地
同 糸島市	同 糸島市	同 糸島市	同 糸島市	同 福岡市西区	同 糸島市	同 福岡市西区	同 糸島市	同 糸島市		現・市町村名
大庄屋淀川紋右衛門	本陣茶屋作右衛門 綿屋藤七 麵屋又六	百姓代五右衛門 百姓代儀兵衛	本陣塩土神社 神主柴田出羽 庄屋伊七	船持治郎吉 船持佐八	本陣庄屋万七 六助	船持治郎吉 船持佐八	本陣庄屋丈右衛門 兵吉	庄屋文助		宿泊宅
後手、志摩郡荻浦村福岡領、怡土郡神在村中津領界多久川中央より街道を松末村字下松末、羅漢橋手前を歴て羅漢川尻、それより沿海逆測、宇田ノ浦にて合測。先手、荻浦村字井樋堰より加布里村を歴て松末村字田ノ浦にて合測。中津代官使者に來、国産を贈。唐津代官來る、忠敬と坂部へ国産を贈。	測。前より芥屋村字黒磯にて両手合測。	玄海島渡海一周測。西ノ浦人家前浜より野北浦人家前まで測る。	芥屋村字船津浜より測り初め大戸崎岬波高く周回ならず一町程前遠見番所へ打上それより海辺へ下り塩土神社鳥居前及び芥屋村止宿入口海辺を歴て字黒磯にて両手合測。支隊、野北浦人家前より芥屋村字黒磯にて両手合測。	岐志浦より芥屋村字野部崎、字仏崎を歴て字船津浜まで測る。此日海岸巖石大難所、或は山へ登下て測る。恒星測定	西浦村字西浦岬より西ノ浦人家前まで測る。玄海島へ渡海の時、波高にて止、再宿。	久家村より乗船、姫島、波戸出鼻を測る。地方へ立戻、船越浦字多田羅より久家浦北浜、久下村止宿前を歴て岐志浦止宿まで測る。	今津村字野間より宮浦村を歴て西浦村字西浦岬まで測る。	辺田村泉川尻より枝笹山字波戸場、久家浦南浜を歴て横切向海北浜に測る。南浜より船越浦字鷺ノ首出鼻を歴て字多田羅まで測る。		特記・天体観測
一八九	一八九	一八九	一八九	一八七	一八九	一八七	一八九	一八九		大図番号

20	19	18	17	16	文化9年8月	宿泊日・旧暦
(25)	(24)	(23)	(22)	(21)	後手小休	(西暦) (1812)
同	同	唐津城下刀町	浜崎村橋口町	鹿家村字前浜	吉井浦	宿泊地
同	同	同 唐津市	佐賀県唐津市	同 糸島市	同 糸島市	現・市町村名
同	同	本陣米屋又吉 菊屋治助 菊屋儀七	本陣庄屋恒五郎 藤太郎 兵蔵	百姓政六	本陣浦庄屋九十郎 庄屋専六 百姓富左衛門	宿泊宅
逗留測。大島一周測。大島より 汐干に付淵上を地方へ渡、逆測 妙見浦人家前に繋ぐ。	逗留測。鳥島、高島一周測。満 島村より沿海を松浦川尻にて川 を渡り、唐津城の石垣に添て測 り字西ノ浜に繋終る。恒星測定	後手、浜崎村橋口町より唐津長 崎街道追分を歴て名所虹ノ松 原、虹ノ浜まで測る。先手、淵 上村玉嶋川尻より沿海を虹ノ に繋ぐ。それより両手一同、虹 ノ松原街道を満島村海辺を歴て 満島渡場まで測る。それより松 浦川乗船唐津へ渡り市中を測 る。唐津候より国産を被贈下。 恒星測定	後手、福井浦より鹿家村字小畑 を歴て海辺に包石あり古は鼓石 という。それより筑前国鹿家 村肥前国淵上村国界を歴て玉嶋 川尻より川端、南山村字玉嶋の 神功皇后社前まで測る。玉嶋川 口石垣町より橋口町制札角に繋 ぐ。先手、吉井村字野嶋崎より 沿海を鹿家村字前浜を歴て字小 畑に繋ぐ。一同、玉嶋社へ参 詣。恒星測定	後手、松末村羅漢橋前より街道 を深江駅過行て左に鎮懐八幡宮 小社あり。それより佐波村、大 入村を歴て福井浦まで測る。先 手、深江村街道、海道追分より 沿海並岬回り福井村海辺まで測 る。恒星測定	一八九	特記・天体観測
一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	大図番号

25	24	23 *	22 *	21 *	宿泊日・旧暦 文化9年8月	(西暦) (1812)	宿泊地	現・市町村名	宿泊宅	特記・天体観測	大図番号
(30)	(29)	支隊小休	(28)	【支隊】 (27)	支隊小休 支隊屋休 相賀村	(26)	打上村	同 唐津市	本陣大庄屋坂口藤兵衛 源之助	唐津城外呼子街道より佐志村枝 浜田、佐志川土橋を渡り馬部村 内名古屋街道追分を歴て打上村 まで測る。	一八九
同	呼子浦中町	屋形石村字吉海	呼子浦中町	湊村 打上村	湊村	同上	同上	同 唐津市	庄屋太郎左衛門 庄屋敬吾 庄屋平十郎 俵屋利兵衛	唐津村妙見浦より佐志村字佐志 浜を歴て唐房村、相賀村を経て 湊村止宿入口迄測る。	一八九
同	同 唐津市	同 唐津市	同 唐津市	同 唐津市	同 唐津市	同 唐津市	同 唐津市	同 唐津市	本陣大庄屋坂口藤兵衛 源之助	唐津城外呼子街道より佐志村枝 浜田、佐志川土橋を渡り馬部村 内名古屋街道追分を歴て打上村 まで測る。	一八九
同	本陣客館亭主分 庄屋中江正平 小間物屋源右衛門 細物屋源助	呼子浦鯨組頭中尾甚六	本陣客館亭主分 庄屋中江正平 小間物屋源右衛門 細物屋源助	庄屋平十郎 俵屋利兵衛	本陣大庄屋坂口藤兵衛 源之助	同上	同上	同 唐津市	庄屋太郎左衛門 庄屋敬吾 庄屋平十郎 俵屋利兵衛	唐津村妙見浦より佐志村字佐志 浜を歴て唐房村、相賀村を経て 湊村止宿入口迄測る。	一八九
同	高島半周測、加部島測、松 島初嶋より終も同じ旗に繋とい えども実の一周ならず。大難所 絶壁ゆえ山越して初の幟に繋 ぐ、加唐島を測。	星測定	星測定	雨天逗留。	雨天逗留。	同上	同上	同 唐津市	本陣大庄屋坂口藤兵衛 源之助	唐津城外呼子街道より佐志村枝 浜田、佐志川土橋を渡り馬部村 内名古屋街道追分を歴て打上村 まで測る。	一八九
一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	一八九	一八九

2 *	1 *	文化9年9月	【本隊】	2 9	2 8	2 7	2 6	文化9年8月	宿泊日・旧暦
(6)	(10. 5)	(1812)		(4)	(3)	(2)	(10. 1)	(1812)	(西暦)
同	仮屋浦			今村	同	同	名古屋村		宿泊地
同	佐賀県玄海町			同 玄海町	同	同	同 唐津市		現・市町村名
同	本陣庄屋彦兵衛 百姓弥五郎			本陣大庄屋 松本勘左衛門 組頭利兵衛	同	同	本陣大庄屋世戸与一 曹洞宗池福山広沢寺		宿泊宅
星測定 仏島、藤島々並横切一周測。恒	今村海辺より外津浦、普恩寺村 を歴て大藺村内ウジ口崎まで測 る。恒星測定			門谷他3名、名古屋村城山遠見 番所より番所海辺追分、名古屋 浦船場を歴て字野本に繋ぐ。名 古屋浦船場より波戸村にて両手 合測。永井他3名、城山遠見番 所より太閤御陣所石垣、西御門 の跡を出て、諸大名の陣所跡脇 を歴て海辺入江の奥、字串浦に 至り、波戸岬を回り波戸村にて 両手合測。恒星測定	逗留測。馬渡島一周測。外に平 瀬、雷瀬、大瀬を測。	逗留測。門谷他3名、名古屋村 遠見番所海辺追分より字野本海 辺、石室村を歴て馬部村名古屋 街道追分に繋ぐ。永井他3名、 加部島を測り終る。横竹村字渡 り向より字早田を歴て字野本迄 測る恒星測定	忠敬、坂部呼子浦より乗船、直 に名古屋村着山島を測る。他 は、加唐島を測り終る。恒星測 定		特記・天体観測
一八九	一八九			一八九	一八九	一八九	一八九		大図番号

10	9 *	8 *	7 *	6 *	5 *	4 *	3 *	宿泊日・旧暦 文化9年9月
(14)	(13) 昼休	(12)	(11)	(10)	(9)	(8)	(7)	(1812) (西暦)
同	伊万里町下町	瀬戸村字戸渡島	同	小黒川村	波多津浦	高串浦	星賀村	同
同	同 伊万里市	同 伊万里市	同	同 伊万里市	同 伊万里市	同 唐津市	同 唐津市	同
同	本陣町役亀右衛門 源五 半助	百姓十平	同	本陣大庄屋柴田平治 姓源太夫 百	本陣庄屋太十郎 百姓安兵衛 百姓中右衛門	本陣庄屋嘉十郎 約分庄屋敬吾 十左衛門	庄屋治助	同
不測。	小黒川浦より唐津領、佐嘉領界を歴て瀬戸村字ハヤリ新田より牧島の間新田横切伊万里川を渡り伊万里町海辺打止を歴て下町止宿前を経て新町限佐嘉唐津追分碑に繋ぐ。忠敬、今泉、尾形食傷にて急病。	逗留測。乗船し福田村鰐口新田より小黒川村迄測る。汐入崎、蚊屋島、沖小島、金剛島、金剛瀬一周測。唐津候より国産を被贈。	波多津浦より煤屋村明神崎を歴て福田村鰐口新田迄測る。大瀬島、沖島へ渡り一周測。黒男明神崎より大島、竹島、音ヶ瀬、日割瀬、満切島を渡り一周測し、地方へ繋ぐ。恒星測定	高串浦より乗船し杉野浦へ着。手分坂部方は唐津に向て測る。湯野浦村字舟隠より辻村波多津浦迄測る。久留米候より贈、国産溝口紙持参。恒星測定	星賀浦より田野村高串浦測所迄測り、先手山越横切残杭へ繋ぐ。牛島一周測。大松島、小松島遠測。恒星測定	納所村字海士子崎より大崎、綾崎を歴て星賀村字蛸ノ浦、星賀浦を経て星賀村止宿打上。恒星測定	逗留測。石田村海辺より牟形村字大串新田にて別手と合測。ウゲヤ島、又ウゲヤ島、玉子島半測。竹子島、丸瀬島、ワナレ島一周測。	特記・天体観測
一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一八九	一八九	一八九	一八九	大図番号

文化9年9月													宿泊日・旧暦
【支隊】													(西暦)
(1812)													
9月1日													宿泊地
2													現・市町村名
3													宿泊宅
4													特記・天体観測
5													大図番号
6													
6	(10)	唐津刀町	同	唐津市	米屋又吉 菊屋治助	杉野浦村海辺追分より唐津街道を竹木場村字石切の辻峠を歴て唐津村字熊野原呼子街道追分に繋ぐ。無測にて禪宗京都南禅寺末瑞鳳山近松寺、浄土宗京都知恩院末清涼山浄泰寺へ立寄。	一八九						
5	(9)	同	同	同	同	逗留測。満越村字満切より大浦村字名切鼻を歴て中浦村字本満切より帆立山へ渡る。帆立山並出鼻とも一周測。中浦村字本満切より杉野浦村人家下唐津街道追分を歴て湯野浦村字船隠迄測る。	一八九						
4	(8)	杉野浦村	同	唐津市	百姓喜右衛門 百姓徳左衛門 百姓平四郎	田野村入江奥より田野村字波石崎を経て満越村字満切、島山の渡口を歴て字満切迄測る。島山一周測。乗船し杉野浦へ行。	一八九						
3	(7)	高串浦	同	唐津市	庄屋嘉十郎 百姓敬吾 百姓十左衛門	菖蒲浦字下場より入江逆測、梅崎村を歴て牟形村字大串新田にて順測合測。梅崎村より街道横切、田野村海辺入江奥に下る。これより海辺逆測、高串浦人家前迄測る。	一八九						
2	(6)	納所村	同	唐津市	庄屋清四郎	向島一周測。納所村字海土子より沿海逆測、京泊浦を歴て鶴牧村内菖蒲浦字下場迄測る。仮屋村の海岸に立寄、鼓石、大鼓石、笈石、竜ノ駒墓所を一見。	一八九						
9月1日	(10.5)	今村	佐賀県玄海町	本陣大庄屋 松本勘左衛門 組頭利兵衛	名古屋村字串浦より諸大名の陣所跡脇を歴て今村止宿入口に繋ぐ。	一八九							

10			9	8		7		文化9年9月	宿泊日・旧暦
(14)	支隊昼休	支隊小休	(13)	(12)	支隊昼休	(11)	支隊昼休	(1812)	(西暦)
伊万里町	山方村字久良木	桃ノ川宿	大川野宿	徳末宿	久里村字松ノ下	鏡村	久里村字松ノ下		宿泊地
同	同	同	同	同	同	同	同		現・市町村名
伊万里市	伊万里市	伊万里市	伊万里市	唐津市	唐津市	唐津市	唐津市		宿泊宅
源又 半助	本陣町役亀右衛門	油屋忠兵衛	領主の茶屋一ノ茶屋 麻生治郎左衛門 二ノ茶屋 駒鳴庄屋甚作	大庄屋桜井理八郎	大庄屋長谷川益蔵	大庄屋竹内彦左衛門	大庄屋長谷川益蔵		特記・天体観測
伊万里長崎追分より長崎街道を 駒鳴峠を越し松浦川宮ノ瀬の渡 し歴て大川野宿制札迄測る。そ れより仕越唐津領川原村、佐嘉 領桃川村界迄測る。			伊万里長崎追分より長崎街道を 駒鳴峠を越し松浦川宮ノ瀬の渡 し歴て大川野宿制札迄測る。そ れより仕越唐津領川原村、佐嘉 領桃川村界迄測る。		鏡社前より浜崎村、唐津街道、 長崎街道追分に繋ぐ。浜崎村橋 口町制札より筑前街道測る。浜 崎浦を歴て字洲崎渡場より玉島 川を渡り淵上村川端に繋ぐ。そ れより無測。養母田村字瓦屋、 長崎街道佐嘉街道追分より長崎 街道を畑島村を歴て徳末村徳末 宿制札前、伊万里道、長崎街道 追分に繋ぐ。		唐津水主町字船宮橋より長崎街 道を和多田村字大曲を歴て養母 田村字鳥帽子岩、両松浦川左右 より落合。字瓦屋、佐嘉街道追 分を経て松浦川土橋を渡り橋本 村、佐嘉街道、鏡村街道追分よ り黒髪山より流松浦川舟渡、久 里村字松ノ下を歴て鏡村、鏡大 明神前迄測る。鏡山と号は、神 功皇后此山に御登り鏡を以御姿 を見給、旅の勞の影恥かしと鏡 を捨給いしより鏡村鏡山とい う。鏡大明神、曹源山恵日寺に ついて詳細に記入あり。		大図番号
一九〇	一九〇	一九〇	一九〇	一八九	一八九	一八九	一八九		

奥宮正樹「測量日記」の紹介（完結編）

戸村 茂昭

本稿は、伊能測量協力者の子孫にあたる高知市在住の大久保朝子様が土佐史談に投稿され、231号及び232号に掲載された「奥宮正樹『測量日記』」翻字＝伊能忠敬測量隊の案内をした土佐藩役人の記録」の転載です。

廿日 つとめて宿を出。かの主なん二手に別れて物す。一かたは坂部組、楠島、赤葉島測量。一かたは伊能組、生見なるのぶより浜辺測量。とし村、坂部方に従ふ。己、伊能につく繁木も同じ組。
そも、いかさまなる業ぞとみな人々守り居るに、藤かつらと云物にて作りたる長さ三十間丁繩也。磯きわ引渡し、何丁々と記。少し方位の曲りたる方にては、小方位と云器さし渡し三寸斗のじ石也。居て、方位心々に物に

記す。此小方位八十二支を三百六十度にわりていと委曲なる物也。その一度を六ツに見分てしるすよし也。式尺計りなる台に居てもたり。人々見あきらめて或は一人、何の一令何と云。又一人、何の一何と云。そをとり集めてなにして方位定むるなるへし

又青木某は絵を書人にて巻紙物にのせて行く、打見る島山人家など認むさて思設けぬことのみとみに有れば、ことゝみなたかひてすへなのこと多かり。かの生見なるのぶの鼻にて、彼の人々いたく腹立たしく、是はいつこより行へきや。かく悪しき公事のかねて聞え置つるを、など道の設もなきやなど、云口論む。かかる地をだに通はせんとは思ひもよらぬを、路はこなたに造りたりといへど、聞も人れず。宮崎繁木いたく思困して、こは如何はせん云程に、時もやううつりて、かれ食もたせたる人足も、飯屋まで行き

又青木某は絵を書人にて巻紙物にのせて行く、打見る島山人家など認むさて思設けぬことのみとみに有れば、ことゝみなたかひてすへなのこと多かり。かの生見なるのぶの鼻にて、彼の人々いたく腹立たしく、是はいつこより行へきや。かく悪しき公事のかねて聞え置つるを、など道の設もなきやなど、云口論む。かかる地をだに通はせんとは思ひもよらぬを、路はこなたに造りたりといへど、聞も人れず。宮崎繁木いたく思困して、こは如何はせん云程に、時もやううつりて、かれ食もたせたる人足も、飯屋まで行き

ぬれをばたせしふ西をさそはうしかりもの重く
のさしてけさるをばねしうたはせしうたはせし
ぬれとさあねとさく大らぬしけた水いふうそこれ

くらにふし金三平も走りの水戸屋だわの
 せうりたの心あは、
 ちぬ身代りしてとあめれ生んとさもねとあらを、
 せうんばせもくらとんとあふ、己めれたるふーとしあきと、
 こあんておえとにきばわたるふあ、いふこりし申れ
 甘斗ねをり着てあふ、
 だくのれ國若みして北屋ちとちあふ、と村おこしあ、

四月二十日 薄曇。朝六ツ半頃 土州安喜郡甲ノ浦出立。手分。我等、下河辺、柴山、青木、稻生、甲浦止宿下より初、逆に阿州、土州の界、昨十八日測留杭へ繋。それより又止宿下へ引返し、順に白浜浦、河内村、生見村、相間（野根の内）ハツ半後、野根浦へ着。本陣 五郎左衛門。脇 忠三郎。此夜晴曇。雲間に測。川内村庄屋 小川忠吾 野根浦庄屋 安岡佐近助 出て案内。

廿一日、お元が明きてぬね又立出、糸おれを二張り

有りて、（注）の紙は四角、大木と云ふより、兼て紙は、
俗に云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、
る、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、
は、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、
幕、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、
申、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、
に、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、
と、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、
云、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、（注）の紙と云ふ、

廿一日 天氣よし。明はてぬ程に立出。けふはかの人々一組になりて、淀の磯辺測量。大谷と云処に兼て設るたる仮屋にわり子など物す。かねて思定めたるには、事違ひて、用おほきに、行さきゝゝのこといかが阿らんとつはらに高知へ文遣しつ。午時過、崎浜なる入木村につく。

文治五年四月二十一日
 伊能忠敬緯度開測記念
 北緯三十三度二十四分半

佐喜浜浦
宿泊記念碑

ここにも幕打張りて、休所設。この渡よりは松原にて道もよし。申の時ころ
 崎浜につく。御泊り大庄屋寺田六兵衛 他に耆軒 けふはきのふに引かへて、日一ひ静にしてこともな
 し。人々胸少し明きたりと云。今夜も北辰量る。戌時にも有ん。爰の名主来
 りて云。行先き、鹿岡、山の端、日置坂など常の道ならんは

人ありとハサありと云ふ女は、
己が毎朝いそがしく寝るに
とれ、いそがしく寝るに
門は、あてり、
一里、
いそがしく寝るに
いそがしく寝るに

しゆ。心ある事也かし。才も世の常にはあらず。この女は早く人の家に嫁したりしが、幸なくてかへりつと云。此妹にかた輪人有り。としは廿余まりと云に、七八の童の様したり。北岡某、己が夜毎にしも寝ず。しかもかく畏途に只一人出立ことの、いかにうからんとて、かの任人の設にとて用意したる駕籠を、大送してかゝせてこしたり。うれしくて門口より乗て行。つかれたる程なればいと安き心地す。一里余り往たる程に人足ひそかに呼ぶ。何事ぞと寝おぼれながらとへば答、今狼、二、三、なきつ。聞給ふやとていとおおる。かのかれるなど思出つ。此狼もし病の

付たんが、
己が毎朝いそがしく寝るに
とれ、いそがしく寝るに
門は、あてり、
一里、
いそがしく寝るに
いそがしく寝るに

付たらんはまことに恐ろしきもの也。人をもおそれずくひ付と云。何かしの国人は鬼と云、と物に見へつ。寅の刻計、椎名につきて名主めして人あまたゐて、かのひ置坂、磯路造り、下枝かりなどす。卯の時過るころやうゝと終りて椎名に帰りて休む。

「当該日の伊能忠敬測量日記」

四月二十一日 晴天。朝六ツ半頃 野根浦出立。我等、柴山、青木、稻生、同所より測初、佐喜浜浦迄測。止宿 本陣 井筒屋宇助。脇宿 井筒屋辰三郎。此夜晴天測量。同村庄屋 寺田六郎右衛門、同倅雄五郎。

今日(注、廿一日)は伊能主し船にて三津浦まで先立て行。やがて例の測量あり。鹿岡の西なる麓にて物など出ず。椎名の小寺にて、又休所設く。かの日置坂、いたく心に懸りたるも、何事も量り終りて、申時過三津に着。御宿井筒寺外に小宿取り有こゝは、いたく民も貧しく小村にて家もなし。こなたの人々の宿はいたくせまく、

三、
さ、
わ、
終、
こ、

己が毎朝いそがしく寝るに
とれ、いそがしく寝るに
門は、あてり、
一里、
いそがしく寝るに
いそがしく寝るに

廿六日 例のつとめて立出。けふも坂部など無測量にて行。未の時安喜につく。例の北辰測量。北岡十右衛門俄に高知に帰る。北山行のことゝもつはらに物す。

坂部貞兵衛、芝山伝左衛門、上。
田文助、家来三人、半取左助。

こよひは北山のことにて用おほし。

〔当該日の伊能忠敬測量日記〕

四月二十六日 朝晴曇。六ツ半頃 田野浦出立。我等柴山、下河
辺、青木、稻生、佐助、同村下より初、安田浦 唐浜浦、下山村、伊
尾喜浦、それより松田嶋浦を歴て安喜浦下迄測。ハツ頃に安喜浦
着。本陣 万歳屋久左衛門。脇宿 升屋幸平。下山村庄屋 庄助、安喜
浦庄屋 松本新左衛門。同断 須藤長兵衛寮内。

廿七日 例の如し。けふは坂部組、先手にて、手結の三軒家より測量始む。
とし村は随う 三軒家まで。
船にて行 後手は安喜の宿りより始。

[illegible]

和食本村にて午餐物す。午時三軒家まで測りやうす。幕かこゐして休所設く。ある人この磯に蝮多しと物語す。勘解由主か様の事好む人なりければ、それとらせて見せよと乞ふ。あま三人海に入て、ちひさき貝二つ三つとりて物す。

此蝮の事、其容易に語りしを、御国には蝮はなしと云こと、昔し暴有りし時、公辺へ漸有。今有とてはいかがとて、やうく流れと云ふなき貝とりて、其の蝮はなしと云てくらめつ。

未刻赤岡に着。御宿長本堂。又左衛門

けふ高知より時付の文もて来たり。岡崎清助、己等の助として来るよし。やかてつきて物なと語合す。

「当該日の伊能忠敬測量日記」

四月二十七日 朝より晴天。六ツ半頃 安喜浦出立。手分。我等、下河辺、青木、稻生、(善八病氣 代藤吉)、同村止宿下より初、安喜郡和食浦を歴て香我美郡手結浦迄測る。坂部、柴山、文助、佐助、手結浦より初、夜須村より岸本浦を歴て赤岡浦迄測。後手はハツ頃先手は九ツ頃に着。赤岡浦本陣 長木屋又左衛門。脇宿 長木屋次惣右衛門。此夜晴測量。手結浦庄屋 左近右衛門、年寄万藏、夜須村庄屋仲平、岸本浦庄屋長尾喜代次案内。赤岡村大庄屋 浜五郎平同断。

廿八日 寅刻過立出。けふ北山行。高知まで無測量にて行。己人々より先に立出。野市村植村半之丞家にて

少休もなれど、御免を蒙るべくして、今おありのことと
 らくおありまうと、未だ中へ、言ふ程お外へお出なされ
 才あつて、已みやとや、おもひうきおあへ、おあふ時といは
 になふるいと、村々おあへ、おあふるるるれいとて、又霜
 ちかつかうと、おあふ、おあふたうと、回りおあふとて、

廿九日未明より白き雪も降りぬばくふくふく雪も
 せきす、一り月もふくぬがあけり降りて霽ぬ、
 五日朝、雪ぞ晴たぬどく、焚て、雪ふくふくふく
 よて人に向ふた、雪ふくふくふく雪ふくふくふく
 村多のふくふく雪の希國、ふくふく雪の希國、ふくふく

小休。又後免町細木某の家にて食物出す。己もしはらく家路に立よる。未時計・高知種崎町辰巳屋伝左衛門方につく。己はやとや、何と云者の家也。赤岡に残りて、伊能に随ふ人々は、とし村、繁木ら也。北山道俄の事なれはとて、又西村東左衛門加る。こ宵は空曇りたり。雨にならんと云。

「当該日の伊能忠敬測量日記」

四月二十八日 朝より晴天。大手分。坂部、柴山、文助、佐助、六ッ半頃出立。無測量にて直に高知の城下に至り、当土佐国の横切（土州長岡郡 予州宇摩郡）境 笹ヶ峯迄測んとす。我等、下河辺、稻生、藤吉、赤岡浦下より初、吉原村、久枝村を歴て、前浜村迄測る。止宿 本陣 南光山真言宗正興寺。脇宿 浜田 幸右衛門。此夜郡方下役 馬場三八、郷方横目 杉平秀平、高知城下より来る。此夜大曇。別手 高知泊。野市 村庄屋 楠瀬六郎右衛門、吉原村年寄宇平、佐古郷大庄屋嶋崎森之丞、前ノ浜村庄屋 武作、同年寄嘉右衛門

廿九日 未明より雨ふり出。道もあしければ、けふは高知に滞在せさす。一日用もなければ家路に帰りて寝ぬ。

「当該日の伊能忠敬測量日記」

四月二十九日 朝大曇天。六ツ半後 前浜村出立。我等、下河辺、青木 稻生、藤吉、前浜村下より初（無程小雨）、長岡郡浜改田村、十市村、仁井田村、を歴て、種崎浦へ九ツ半頃に着。止宿 本陣 鍋屋仁作。脇早義十左衛門。上田村庄屋 中内弁之丞、同村年寄 津田甚左衛門、下嶋村庄屋 島村克治郎、同年寄 重藏、立田村庄屋 岡田弥三之丞、同村番頭新助、物部村庄屋 恵左衛門、年寄 四郎右衛門、同

助作、里改田村庄屋 宇賀六郎右衛門、浜改田村庄屋林八、久枝村庄屋 茂右衛門、仁井田村庄屋 浜口喜太右衛門、種嶋浦村庄屋 岩松勇藏。(此日、朝小雨に付別手高知逗留)。

五月朔日 空少し晴れたればとく起て、高知へまかる。山田はしにて人に問ふに、かの人々只今立給ふと云に、心あはたし。一宮村鳥つきと云地に例の幕囲す。巳時計布師田村庄屋

萬葉集にたづねて、吾々共々、ふりて、を、ふりて、酒の、き、は
 ぞ、そ、し、は、ふ、酒、の、例、を、し、て、ま、け、以、て、け、る、ま、か、い、と、あ、ま、
 け、わ、さ、た、い、あ、ま、ら、た、は、た、り、は、あ、ま、ふ、り、あ、ま、ふ、り、あ、ま、ふ、り、
 あ、ま、ふ、り、

[illegible]

奥田常右衛門家にて昼食出す。常通寺島なる西の寺にてしはし休ふ。例の測量して未時比江村に着く。御宿屋某家也此北山道は、君公大江戸に往かい給ふ道にて、己等も度々物しつ。

「当該日の伊能忠敬測量日記」

五月朔日 坂部、柴山、文助、左助、高知種崎町より測初、新市町、蓮池町、山田町にて市中は終る。それより江ノ口村、荻江村、一宮村、布師田村(郡変)、長岡郡中嶋村、吉田通 寺嶋村、国分村、比江村迄測

二日 明はてぬ程は雨猶ふりしを、辰時計晴れたれば立出。岡村東左衛門先達て行。己随ひ行。領右の駅、比江より一里と云。市の瀬川かち渡り也、こにも休所設く。宍崎村、小川渡りて亀岩村名主の家にて休む。少し行て、権若坂、山路岨し。石ケ休場、中の休場、峠の休場など有。この麓よりかはりて先に行。峠の休場にてややいこふ。山路なれば木々の枝覆ひ路曲りて

[illegible]

思ままに纏もひかれず。所々高低などかの小げんぎしてはかる。申時計穴内につきて宿る（御宿）。はやく道造りに来たりし人、中島十九郎、北代太藏など夜ふけて宿りに来る。雨ふりていとくらければとゝめて同じ宿りにいぬ。やがて明けはてて高知に帰る。扱この穴内と云地は、四方みな山打めくり、はつかに其中らに里めく所有りて、家も数多からず。いとひなびたるに、只一夜なれど、人々いぶせがる。比江より四里余。

五月二日 比江村より測初（領石村、植野村入会）完崎村、龜岩村、それより權若峠を過ぎ、上ヶ倉郷穴内村迄測。止宿穴内村百姓權蔵。（二里二十二町五十一間）。

三日 つとめて出立。やかて国見坂にかゝる。名高き大山越也。桃か休場。国見峠の休場、あまた有り。峠に至れば國中つばらに見ゆ。霧深う立て、よもみなおくらきに、時鳥の名告ければ、

然るに其の辭をふまゝにして唐小僧の正統に
たゞふくむを人信にあらうて四よりくぐり

[illegible]

声もれかぬる
山郭公。

国見ねゆ　ふりさけ見れは　建依別

土佐の国内の曲も磯らす。

爰を下りて、高下の休場と云。やゝおりくたりて、飯はし渡りて、おちこち

[illegible]

と札立たり。境の真中を左右を別る水流れとして少しよけて境木立るなん、作法なるへしと云。此みねにて物敷渡ししてわり子物す。与州より名主めく人二人出会たり。御国よりは郡の先遣、近藤三平なん、従ひく此舟の名芳一、人字摩郡父庄屋、名つれつ程よく事はてゝ、元の道に帰る。未時立川本の宿りにつく。昨日物せさりし川口よりこなたを、けふ日高しとて、いぼまで測る。酉の下刻宿に帰る。

「当該日の伊能忠敬測量日記」

五月六日 立川村止宿前より初、笹ヶ峯迄測る。此所（土州長岡郡 予州宇摩郡）境なり。予州より出迎者 松平耆岐守領分大庄屋添役今村源太、矢野淳藏、上柏村庄屋文太、馬立村組頭勇助、長治郎（一里二十五町四十間半）、右ノ者共に笹ヶ峯より川江迄村順里数承候所、国境笹ヶ峯（一里半）、馬立村（今治領一里）新宮村（松山御預御料 今治領二里）、半田村（今治領一里半川ノ江（松山御預 御料所）通斗六里といひ伝。三十六町一里に。しめて凡七里斗もあらんといえり。それより立川村へ戻る。

七日 例のつとめて立出。いぼより川口まで測量はてゝ未時本山土居町につく。

「当該日の伊能忠敬測量日記」

五月七日 立川村止宿前より測初、逆に川口村迄測、一昨五日の止抗へ繋ぎ、街道測量終る。それより本山村へ越て泊。(二里二十五町三十二間半)

[illegible]

八日 明はてゝ宿を出。卯時計雨又ふり出。風も吹くれと用もなく帰れはとゝこふる事なし。

申時 高知に帰着^{御宿屋。} 己宿は種崎高岡屋某宅也。明日は晴雨によらず、測器手入なとにや、滞留と云に布し田に帰る。

「当該日の伊能忠敬測量日記」

五月八日 未明本山村出立。国見峠権若峠を越、夕方高知城下へ帰着終より大雨。大難儀なり。

九日 未時高知旅宿へまかる。昨日用はてゝ後、坂部など一同五台山文珠に詣つと云。辰巳屋伝右衛門主しぶりにて屋形船して酒など出しつゝ夜深るまでせしとぞ。後に聞は坂部二朱とり出て其程の会釈とて送りし云。箕浦幸吉と云人より伊能周蔵えの文ども辰み屋え頼み置しと云。

生、善八、福嶋浦、渭浜浦入会より初、浦ノ内村字灰分、深浦、塩間、出見迄測る。坂部 柴山、文助、佐助、井尻村より初、同村字宇津賀、浦内村宇鍋鳥頭(家四軒)、宇堂浦(家二軒)、字入戸(家二軒)、宇白鷺(家二軒)、宇大崎、字浦八(人家なし)、宇長崎(同)、宇大鹿(同)迄測。我等手は、ハッ頃、坂部手はハッ半後、浦之内出見着。本陣(真言宗春日山千光寺)、脇 清助。此日奥浦東分村庄屋儀 三郎、同西分村庄屋嶋村平内出る。

十二日 こん何内より南は坂部測量。とし村など従。出見より浦のうち渡り坂部組はかる。

〔当該日の伊能忠敬測量日記〕

五月十二日 朝少晴。此日手分。我等、下河辺、青木、稻生、善八、六ッ半 浦内

村出見出立。(坂部組同断)、同所下より初、同村字三ッ松(家二軒)、宇立目(家二十六軒)、字摺木(家十六軒)を歴て奥浦東分村迄測。それより西分村字中ノ浦迄仕越測。

坂部、柴山、文助、佐助、浦内村字大鹿より初、字白崎、字今川内(家十六軒)、字小嶋崎、字福良(家十六軒)、此所に池ノ浦へ越坂あり。凡十二町、字大添(家四軒)。字長崎、字須ノ浦(家十二軒)迄測る。両手共ハッ頃着。止宿本陣 百姓直藏。脇は忠治右 衛門

十三日 坂部、横波よりいの尻渡り測りていの尻に宿。伊能、横波より仏坂、神田より須崎まで測りて須崎にとる。己まかる。

〔当該日の伊能忠敬測量日記〕

五月十三日 朝晴天。六ッ半頃 奥浦東分

村出立。手分。坂部、柴山、文助、善八、昨日手分の測終、奥浦西分村字中ノ浦より初、須ノ浦迄測。昨日の測へ合。それより井尻浦へ越て泊。宿 百姓喜惣平。我等、下河辺、青木、稻生、佐助、奥浦東分村入口(昨日印杭を残置)より初、西分村迄測。神田村を歴て押岡村地を歴、又神田村地先

(此所へ印杭を残す)多野 郷村より須崎浦迄横切をなす。止宿 須崎郷浦大庄屋川洲嘉右衛門。脇宿 富岡屋弥惣右衛門。但、ハッ頃着。湊深十間

十四日 伊能組、神田、山の島、内うみめ南測量、野見渡

行で須崎に宿る。

〔当該日の伊能忠敬測量日記〕

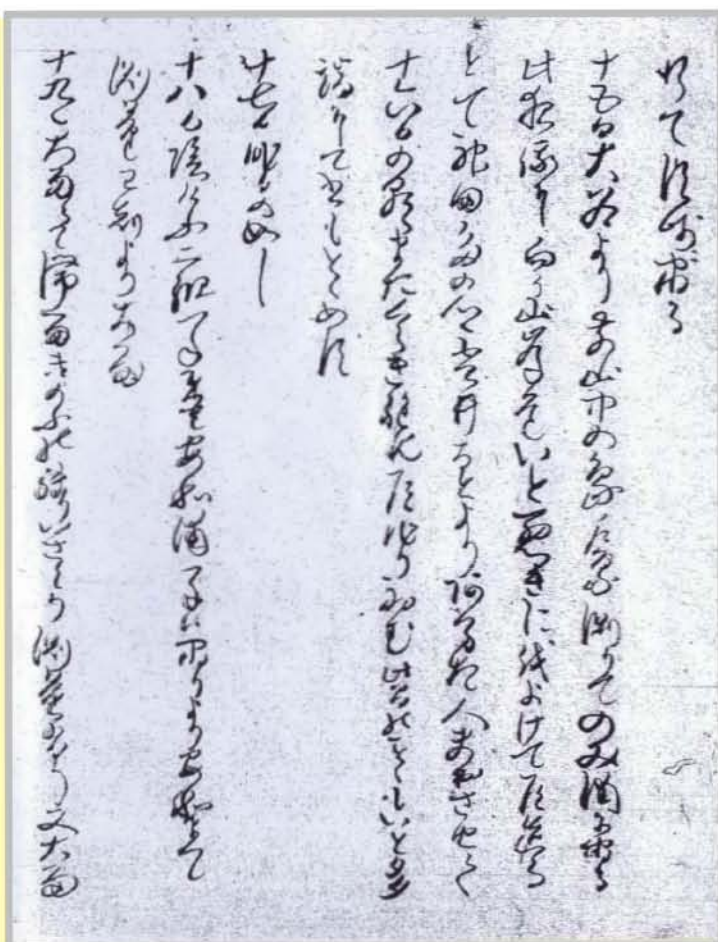
五月十四日 朝晴。六ッ半頃 須崎浦出立。昨日神田村地先印杭より初、

多野郷村、同村串野浦

を測、それより大谷村(枝)勢井を歴て野見村人家下より大谷村堤迄測。乗船して須崎浦(又、須崎郷浦という)へ帰着。別手、坂部、柴山、文助、善八、井ノ尻浦より乗船し、浦内村字ツツラ崎より初、外海通地ノ浦を過ぎ、同村字竹ノ内迄測る。止宿 野見浦枝浦久通浦、百姓弥三郎。

十五日 大谷より前山、中の島、戸島測りてのみ浦に宿る。此夜俄に向か山峯道いと悪きに伐けて道造るとて、神田、多の郷、吾井などよりあまた人夫出させて、

十六日 朝またくらき程道作り初む。此間



十九日、大雨にて滞留。きのふの残りいさゝか測量有り。又大雨。

[illegible]

廿二日 例の如し。幡多郡の普請役生原弥五衛門、森本喜之助等参る。用の事とも示合す。

廿四日 雨ふりて滞留。あすなんことゝはてゝ窪川まで帰りなんと定む。

廿四日
 廿五日
 廿六日
 廿七日
 廿八日
 廿九日
 三十日
 三十一日
 三十二日
 三十三日
 三十四日
 三十五日
 三十六日
 三十七日
 三十八日
 三十九日
 四十日
 四十一日
 四十二日
 四十三日
 四十四日
 四十五日
 四十六日
 四十七日
 四十八日
 四十九日
 五十日
 五十一日
 五十二日
 五十三日
 五十四日
 五十五日
 五十六日
 五十七日
 五十八日
 五十九日
 六十日
 六十一日
 六十二日
 六十三日
 六十四日
 六十五日
 六十六日
 六十七日
 六十八日
 六十九日
 七十日
 七十一日
 七十二日
 七十三日
 七十四日
 七十五日
 七十六日
 七十七日
 七十八日
 七十九日
 八十日
 八十一日
 八十二日
 八十三日
 八十四日
 八十五日
 八十六日
 八十七日
 八十八日
 八十九日
 九十日
 九十一日
 九十二日
 九十三日
 九十四日
 九十五日
 九十六日
 九十七日
 九十八日
 九十九日
 一百日

廿七日 高知布し田へ歸つく。此西郡にても事いたくおおかめれと、書もとゝめす。いとゝおろそかにてなん。

(完)

忠敬没後二百年記念

測量協力者子孫顕彰会の経緯

伊能測量協力者顕彰会事務局

忠敬没後二百年行事の開催を決定し、研究会の予算計上をおこなったのは、香取市長も出席した霞ヶ関ビル总会だっと思う。展覧会が出来ないかと、新聞社、博物館と色々交渉したが、まとまらなかった。それでは自分達だけで、歴史に残る記念イベントをやろうと、伊能測量協力者子孫を東京に招聘して顕彰式をおこなうこととなり、伊能データベース公開と、測量協力者子孫の招聘について、二回にわたり中央紙、地方紙に記者発表をおこなった。

伊能データベースの方は素晴らしい反応で、サーバーのダウンを起こしたほどだったが、御子孫集合については、正直なところ、どの程度の反響があるのか見当がつかなかった。

結果は本誌85号のとおりであるが、理事会の決定は二十五年十二月末で、一月に香取市長に説明にゆき、全国的に呼びかけるなら東京がいいでしょう、というお話をいただいて、始めることになった。発表は平成二十六年二月十五日で、渡辺名誉代表、鈴木代表と伊能忠敬記念館から学芸員も出席して子孫呼び掛けをスタートさせた。具体的な内容は何もきまっていなかった。

最初の名乗り出

平成二十六年二月十六日午前九時〇二分の

メールであった。

「ヤフーニュースで見ました。子孫ではありませんが、人物DBに出ている「平田屋平助」は・・・」という内容だった。子孫を探すことが出来なかったが、勇気付けられる。次の問い合わせは、岩手県大槌町の職員の方から「朝日新聞で情報を見ました」と、大槌村と吉里吉里村前川善兵衛の子孫が健在というものだったが、最終的には陸前高田から一人（同行者二名）と宮古ら一人の計二人の子孫が参加していた。

前者の子孫は「忠敬に使っていただいた夜着（ドテラ）」左の写真。後者は「先祖が遺した日誌（磯鶏日記）」というお宝を紹介していた。



明治維新で落魄した庄屋の子孫

同じく平成二十六年二月十六日午後七時五六分に初日から十六件目のメールが入った。

「ニュースで、伊能忠敬を支援した人々の子孫を探していると拝見しました。第八次測量の文化十年十一月二十四日に、木次町に宿泊した際に舍を提供した土屋半十郎は私の祖先です。

土屋家は明治時代に落魄したため、資料らしい資料は残っておりませんが、ご縁を感じましてご連絡を差し上げた次第です」という連絡だった。この方は最終的には最初の参加者となりました。

感動的なメッセージで激励を貰う

フジテレビの「みんなのニュース」から取材を受け、連絡担当の戸村が平成二十六年二月十七日テレビに登場し、今回の催事の趣旨（伊能忠敬の偉業は協力者あってのものだから、その協力者を顕彰する）を説明した。その番組を見たという視聴者から次のようなメッセージが入る。

「二月十七日放送のフジテレビ「みんなのニュース」を見てお便りいたします。正直申し上げて、目から鱗が落ちたと思います。伊能忠敬については、多くの日本人はこれまで固定化されたイメージを持っていたのではないかと思います。すなわち、「伊能個人の業績によって、日本人ははじめて日本国の正しい姿を知ることができたのだ」と。私もこれまで、同様の印象を持っておりました。しかしながら、私はそのような認識を改めざるを得ないのではないかと感じ始めております。ひょっとしたら当時の日本人の多くは、伊能のプロジェクトに共感をおぼえていたのではないかと。幕閣の要人のみならず、末端の庶民にいたるまでが、伊能の志を聞き、その熱意にほだされ、「この国の本当の姿を見てみたい」と思った結果「全国測量」などという大事業を成しとげることができたのではないかと。「大日本沿海輿地全図」は、伊

能個人というよりも、当時の日本人の知的好奇心の集大成なのではないか、と思いはじめています。今後のご研究に期待いたします」

フロア展で感動した子孫の雄叫び

平成二十六年二月十九日午後四時四分のメール。「新聞を見て、メールをしました」。

当家は、私で十七代目、当時は中嶋伝衛門で（過去帳に記載）蔵入大庄屋の本陣でした。地図の星印☆が当家です。

唐津のフロア展で実寸の地図を見て、感動いたしました。酒造業を営み、栄枯盛衰を繰り返しながら、現在に至っております。

代々続いていますけど、家を建て替えたりしましたので、何も資料が残っていないのが、残念でなりません」。この方はご夫婦で参加してくれました。

ファミリーストーリーを確認できた子孫

子孫探しのニュースからイノペディアの人物DBにアクセスし、仏壇の位牌の名前と一致していることを確認したことがきっかけで、更に図書館などを調べて当家のファミリーストーリーが明確になった、と喜び参加してくれた子孫が複数登場した。

伊能大図の天測印☆で確かめる

「私の五、六代前の先祖に大迫清右衛門という者がおります。（中略）身内に確認したところ、当時の地名で山川村大字福元、今の山川金生町というところ」というメールが舞い込む。その住所の部分と大図を重ね合わせたところ

一致、山川村の止宿先「大迫けさ」の子孫であることが判り顕彰会に参加なさった。



また、埼玉県篠津村の止宿先も、伊能大図の天測印☆を頼りに会員と地元の郷土史研究の人々の調査で掘り出されたのであった。

突然の宿舍提供で協力者となる

赤堀みさお様のご先祖の場合は、休泊触れで止宿先と予め決められていなかったが、忠敬が先触で指定した村には泊家がなかったため、急遽止宿先となったという。赤堀家には早くから町教育委員会によって案内板が設置されていたので名乗り出ていただいた。

口伝はあったが人物DBで子孫と確認

横須賀城下「次郎八」の子孫である小野恵美子様からのメール。「伊能様が泊まったとは

代々言い伝えられておりましたが、証拠もなく確かめるすべもありませんでした。データベースで確認できて、よかったです。」

安藤由紀子さんと友人だった

五島列島太之浦の坪井三之助と坪井繁弥の直系の子孫である坪井隆治様の場合は、奥様が当研究会会員であった故安藤由紀子さんと友人で、安藤さんから伊能の資料を頂いたりしていたことから、伊能忠敬の止宿先ということとは分かっていたので、名乗り出ていただいた。

岡山城下止宿先は歴史好きの岡山TVアナウンサーの調査で判明

岡山城下止宿先子孫の詫間祥江様のことは、歴史好きの岡山TVアナウンサーが教えてくれた。戸村が岡山テレビの取材に応じたのが機縁であった。

会報の原稿に記載の記事を頼って

下総国行徳本村名主の加藤惣右衛門については当会の会報第二十三号「伊能忠敬の房総沿岸測量」のなかで「加藤竹男家であり、江戸川岸の常夜灯に間近く」と説明されていたので、実際に現地に行ってみた。現在そこは文化財となっていて子孫は住んでいなかった。文化財の住所を確認して手紙を出した結果、御参加をいただいた。

最上徳内の妻の実家「島谷家」

蒔苗博道さんのお母さんの実家は野辺地で江戸時代に廻船問屋だった島谷家であるとの

こと。その島谷家に「忠敬来泊」と記述された資料があった。しかし、第一次の測量日記に止宿先は書かれていないので、どうかなと迷ったが、伊能大図の測線と天測印を国土地理院地図に重ね合わせて、場所を蒔苗さんにお知らせした所、そこが島谷家の場所と分かり子孫と確定しました。

執念が実って由緒文書が出現

小野友子さんの最初のメールは次のようなものだった。「私は鹿児島県垂水市出身です。昔、伊能忠敬先生が来垂され、大隅半島を廻られた時に、私の先祖が道なき道をご案内したのだと、母からよく聞いていました」と。しかしながら、ご先祖の名前が分からず、また、測量日記にもそれらしい名前が見当たらなかったが、「道なき道を案内」に関しては、大隅半島日崎の測量をした文化十一年六月十一日の日記に「先手坂部、下河辺、永井、上田、平介、岸良村・南浦村界より（中略）永坪迄横切を測。それより海岸の山の中腹を測る」と記録されていることが分かり口伝と一致しました。それでも子孫と断定することはできなかったが、暫くして先祖の名前と浦役をしていたとの、先祖書が縁戚で発見され確認できました。

半年間、電話し続けて接触

平成二十六年七月四日、次のメールが舞い込んだ。「近江から逃れて五十里に土着した十村大庄屋高島庄右衛門の子孫の方の家から高岡市五十里に家が一軒あり、現在そこには住まいせず、その娘さんが時々掃除等に訪れていら

つしやると、電話番号が知らされた」

「五十里って伊能測量ルートからずいぶんと離れているな?」「十村ってなんだ?」「近江から逃れて五十里の土着?」という疑問符の突いた感想を抱きつつ、以来、なんとか手がかりを得ようと件の電話番号に何回か電話をかけた。半年間反応が無く、諦めかけていた。没後二百年が一年後に迫った平成二十九年の年明けになり、またまた電話したところ、反応があり縋々会話することが出来て、結果として名乗り出ていただいたのが城石闔子さんでした。

新幹線開通で参加出来た子孫

越中の測量家石黒信由さんの御子孫石黒信二さんの場合はこうだった。

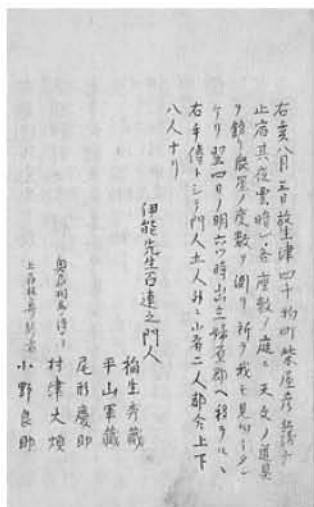
子孫探しがスタートして一年後の平成二十七年四月九日に次のメールを受信「私の実家は富山県の高岡市にあります。祖先の残した古文書に伊能先生や、その弟子の方のお名前の入った書物が有ります。測量関係の古文書です。その部分を写した資料を送ります。自分ではなかなか解読出来ない為に調べて頂ければと思います。いご連絡させて頂きます」。メールに添付されていた古文書は下図である。

見る人が見れば、石黒文書であることは明白であるが、来歴などを考慮し、扱いを迷っていた。結局、越中国高木村の測量家「石黒信由」の作成したものを石黒の孫弟子が書き写し、それを前記メールの送信者の祖先に送られたものであることと判明。連絡をいただいた方の祖先は協力者ではなかったのであるが、今回の大会では会友（北岡浩美様）として参加いただ

た。



(数枚省略)



一方、石黒信由は測量日記には記録されていないが、忠敬と情報交換し伊能測量術の普及を計られたことは明白なので、お声かけすることとし、射水市新湊博物館の学芸員を通じて連絡を御願したところ、「新幹線も開通して手軽に東京に行けるので参加します」ということになった。

非通知設定の電話連絡の為、追跡不能

子孫探しがスタートした直後、携帯に電話が入り、「愛媛で伊能測量のお手伝をした者の子

孫です。今、資料を探しているので改めて連絡します」というところで電話が切れた。非通知設定がされているらしく履歴が記録されなかったので追跡調査が出来なかった。一年後になって次のようなメールを受信した。

「突然にお手紙を差し上げまして失礼いたします。私は、昨年二月毎日新聞に「伊能図測量支援者子孫集まれ」の記事を見まして一度お電話を差し上げた森田と申します。その後何のご返事もしないで、大変失礼をいたしました。私もご先祖様の事を少しずつ調べていると、さまざまな資料を集めています。私の先祖が伊能忠敬測量隊の皆さまを応接しましたことは故郷の「小松町誌」で知っておりましたが、このような研究会があり膨大なデータベースと全国の詳細資料を蓄積し様々な活動されておられることを知りませんでした」と。この方はその後、名誉代表宅を訪れ色々懇談されました。

平成の伊能忠敬の活動に感動した市民の働きかけから名乗りでる

子孫探しがスタートして一年半ほど経過しても、和歌山県からの参加者は出なかった。そのような時に平成の伊能忠敬こと鈴木孝吉さんがリヤカーを引いて四国沿岸一周および紀伊半島沿岸一周の旅に出発した。

そこで和歌山に居る戸村の知人にそのことを連絡。その際、和歌山から子孫の名乗り出が皆無だと伝えた所、彼は地元の新聞や放送局に、平成の伊能忠敬を取材して欲しい、伊能測量協力者子孫の名乗り出を呼びかけて欲しい、と働

いてくれた。

その働きが効を奏し、地元ラジオ局や新聞が動き、その結果として名乗り出てくれたのが太地町の二人の和田さんである。

顕彰に感動し関係子孫全員で参加

子孫であるとの名乗り出ていただいた後、本来誰が受取人としてふさわしいかの気遣いをしていたいただいた方が複数おられました。例えば、「本日、二〇一六年二月十六日づけ京都新聞朝刊28ページに掲載の「伊能の協力者 名乗りを」に関してのメールです。

我が家は京都新聞の購読者ではないのですが、友人からメールがありましたので、参考のためにメールいたします。

我が家は旧亀山藩の本陣でした。屋号は紙屋と申していたようです。伊能忠敬は文化十一年（一八一四）二月十三、十四日、同二十、二十四日の二度、十名で来訪。十三日・二十一日は亀山藩本陣に宿泊した、とあります。

人足の手配、食事の手配など、こまごました資料も残っているようです。『ようです』と書いておりますのは、すでに（昨年三月）古文書は亀岡市文化資料館に寄贈しているからです。昨年四月二十五日からでしたか、この亀岡文化資料館では「企画展示が開催されました。その後企画展資料の編集・発行がなされています。（この冊子の裏には協力者として私の名も掲載されております。本来なら我孫子市に住む弟とするべきだったかもしれませんが）伊能忠敬に関する情報はこの亀岡文化資料館に集められておりますから」。

この方は今回の大会に参加して頂いた桂文子さまで、こちらからは結局友人も含めて三人も参加していただきました。このように三人参加いただいた子孫の方は、陸前高田の黄川田さん、和歌山県太地の和田さん、土佐の国の奥宮さん、薩摩領大隅国の小野さん、鳥取の佐々木さん、福岡の中村さん（こちらは四人）だった。

伊能隊のお世話をいただいた方々は当時から名家の方々とおもわれますが、今まで二〇〇年続いておりますことに、素晴らしいものを感じました。

参加者を集まっていたいたくためには、会員は勿論、色々な方々に変なお世話になりました。資金面では伊能忠敬研究会、イノベディアの資金を拠出いただいたほか、会員各位にも多額の寄付を御願いしました。

欠席ながら寄付だけ戴いた方も多数ございます。招待者からも御寄付をいただきました。それらのご芳名は、会報85号に報告しております。ほかに子孫探しに協力いただいた方々も多数おられますが、当会のご協力の数字的内容はこれまで、公表しないことを建前として参りましたので、ご芳名だけを掲載します。

会員では、馬場、柏木、平田、松宮、山浦、玉造、小坪の各会員と渡辺名誉代表。会友では、石原、北岡ひろみ氏。御子孫からの協力者として福田氏でした。

名乗り出てくれた方々を子孫に違いないと確定したのは、渡辺名誉代表ですが、戸村からも忠敬測量日記と対比し資料提出をいたし

ました。この作業ではイノペディアで提供している測量日記のデータベースを最大限活用しています。

伊能データベース

イノペディア・メンバー全員が手分けして、測量日記解説版に目を通し、測量協力者の名前と協力内容をエクセルに登録して、それをデータベース化しました。平成二十八年二月十五日にデータベース公開と同時に、ご協力いただいた御先祖の顕彰事業を新聞発表しました。データベース発表の際はアクセスが殺到しサーバーがダウンしました。

関係者や子孫の方々は、データベースに公開された伊能測量協力者の名前を見て名乗り出られたわけですが、二百年前の先祖に感謝状を進呈といわれても、そのような催しはかつてないし、どうすればよいか、さぞ驚かれたであろう。

記録にもとづいて戸村からご説明申し上げて御理解いただきました。結果的には予想をはるかに超える参加者をいただき感謝しております。

志の輔師匠の記念落語の成功

この落語会は催しの成功に大きく貢献いただきました。最後に志の輔師匠が紋付の袴上下に身をかため、「業界の仕来りに従い、三・三・七拍子で」といって手締めをさせていただいた情景は、今でも皆様のまぶたに焼きついておられるでしょう。名人芸とはこういうものだ、と深く印象づけられる一幕でした。

香取市も以前に申し込んでいて、ペンディングになっており、研究会に降りてくれとのお話もありましたが、師匠はやるなら両方、断るにしても両方と思いを定めておられたらしく、結局双方上演ときまり、いづれも大盛会となりました。

落語会成功の最大の功労者は岩本さまです。誰から話が出たとかいうようなことではなく、気をつかって志の輔事務所と緊密に連絡を取り、会場の確保、移動手段の打合せ、台本、当日の運営要員まで配慮をいただきました。本日に、ありがとうございました。結果として志の輔師匠に名誉会員を御願いすることになりました。

開会に至る事務手続き

開会直前の事務方は目から火の出るような大騒ぎでした。それでも五分遅れで開会しましたから、火事場の馬鹿力が出たともいえないでしょう。

顕彰大会前日の平成三十年四月二十日（金）、敷地六百坪の豪邸（？）戸村家の六畳間に保管中の山のような記念品（重さは四百キロオーバー）を大会の会場に運ぶためボックススタイルのマイカーに詰め込んで午前十時過ぎに出発。途中、地図センターに立ち寄って「御用旗」を山本会員から受け取り、スタッフの高瀬さんと落ち合って学士会館へ。高瀬さんに手伝っていただいて荷を降ろしてから最後の準備作業場である渡辺名誉代表のマンションに向かう。

今回の催事の特徴は、参加者の参加条件がひ

とりひとり異なっていることでした。参加者のほとんどが軟弱な、フットワークの持ち主のシニアであり、互いに顔見知りではないということでもありました。

ですが、全国から奥様、お子様同伴でお集まりいただき、二百年前の御先祖に功績感謝状を進呈するという例のない催事です。どこにもある普通の儀式ではないので、手作りながら、手間ひまをかけて、喜んでいただくことに徹しました。

具体的には、式場を歴史と風格のある学士会館に選び、感謝状は手作りで個人ごとに実績を記入しました。懇親会のお料理はフルコースを奮発、各テーブルにはリード役を配置と、念をいれました。

映像や伊能地図は手作りし、落語会は名人「立川志の輔」に登場願ひ、二百年記念法要は忠敬の正式なお墓の源空寺墓前、ご案内には都営観光バスを丸ビル前に2台横付けしました。

ガイドにより皇居から説明を始めて、百年前に建立された芝公園の記念碑を拝見。忠敬隠宅、幕府天文台の跡地などを見たあと、富岡八幡の忠敬出発の銅像を作者の解説で鑑賞し、墓前法要のあと東京駅前で解散という慌しくも充実した二日間だったでしょう。

途中の座席は全て指定席とし、ご夫婦、同伴者など参加者の個々の事情を尊重して配列しました。

種類の多い指定券の袋詰めは、恐ろしく大変な作業でした。始から、段取りしてあれば、問題はなかったのですが、手が廻らず立ち遅れて、手作業で現場配布となってしまいました。

戸村と高瀬は午後二時すぎにポスターを持って準備会場の渡辺宅に到着。そこでは既に鈴木由生子会員が先祖名を記した個人記章の準備と、記念品袋のラベル貼りを始めていました。

宮内理事、渡辺夫人の協力を得て指定券を個人別にまとめて入れましたが、大作業になってしまい、夜遅くまで掛かりました。並行してポスターを丸めてビニール袋に収める作業はスタッフの横溝さんと高瀬さんが途中から加わって終わらせてくれ、鈴木由生子さんの個人別記章の準備および記念品袋へのラベル貼りもその時点までかかって終了して帰宅されました。

当日、学士会館でやるべき作業は、子孫の名前を貼り付けた紙筒に入った感謝状を記念品袋に個別に入れ込む作業、それを予め指定された座席に置く作業、並びに参加者の名札が貼られた記章を受付台に並べる作業でした。

当日の作業要員は二十数名が予め指定されており午前十時半頃には集まってくれました。いざ作業を始めようとしたとき問題が起きました。

前日の準備段階の考えでは、個人別に名前ラベルが付けられた感謝状や土産袋などの配布物は受付でお渡しし、その後にお客様を自席までご案内する予定でした。しかし、受付の混雑緩和や、ご高齢の方もいらっしゃることから荷物を持つての移動を考慮し、お座りいただく座席まで、それぞれに異なる配布物を事前に用意しようとしたため、各配布物と座席との対応表がなかったために作業は手間取ることになり混乱をきたしました。

既に、子孫の方々も集まりだしています。とにかくやらねばなりません。鈴木代表、高安副代表も手伝っていただきました。受付は堀野さんが一手に引受けて応変に実行してくれました。結果として予定より五分遅れで顕彰式を始めることができました。戸村は受付、袋配り、来客の応対と動き廻りました。

顕彰式はプロ司会者の小川さんの落ち着いた捌きでプログラムどおり厳粛に格調高く進みました。

顕彰式終了後の参加者に対する懇親会の指定座席への案内は、高瀬さんの思いつきで、会場アナウンスをいただき、無事に乗り切りました。

顕彰大会が終了し、素晴らしいイベントであったと参加者からは、メールや手紙で沢山の礼状をいただきました。しかし、楽屋裏は以上のように薄氷を踏む思いでした。何とか納まったのは、要請に応じて、全国からお集まりいただいた会員諸兄弟の頑張りだったとおもいます。

参会の御子孫の皆様から、参加の研究会会員の皆様、要請に応じて当日役員として準備作業をお手伝いいただきました会員の皆様、不手際な状況にも係わらず、盛大なお褒めのお言葉をいただいた参加者の皆様に厚く御礼を申し上げます。

(渡辺・戸村記)

参加者のお便り追補

会長 渡辺一郎様 戸村茂昭様

拝啓 先日は 伊能忠敬没後200年記念伊能測量協力者顕彰大会へお招き頂き、有り難うございました。夢の様な舞台で光栄でした。先祖も喜んでいたと思います。功績感謝状は、大切にして、後世に語り継いでいきたいと思えます。

早速、私の質問「どこから、どの様に、連絡が入るのでしょうか。」について、ご回答（詳しく）頂いて、有り難うございました。

この質問は、近くのトコヤさん（長年付き合いのある）に感謝状を頂いたと話した時に、トコヤさんが質問されたのです。

たぶん、人力か、馬で、手紙が来ると思うと話をしたので、質問した次第です。

回りの人々に、こういうことがあったのだと、話を広げていきたいと思います。又、近くに来られることがありましたら、お立ち寄りください。今後とも、よろしくお願い致します。

敬具

平成30年5月8日

〒849・4256

佐賀県伊万里市山代町久原

川浪富士夫

平成30年度九州支部総会報告

九州支部長 石川 清一

恒例の九州支部総会（今回から例会を呼称変更）が平成30年6月23日（土）午前11時から福岡市立南市民センターに於いて福岡・佐賀はもとより、遠方の長崎、熊本、山口の各県から会員15名、ゲスト参加5名（内入会予定者2名、会員同伴者3名）計20名が出席し開会しました。冒頭、支部長より研究会本部鈴木純子代表理事から届いたメッセージ、4月の伊能忠敬没後二〇〇年記念「伊能測量協力者顕彰式」及び関連諸行事への九州支部の協力へのお礼と、今後の支部激励のメッセージを披露した後、支部長から2日間にわたる没後二〇〇年記念行事について概要を報告した。



伊能測量協力者顕彰式が開催された
学士会館

4月21日（土）の第一部、東京神田の学士会館で行われた伊能測量協力者顕彰大会は、全国各地から多数のご子孫と同伴者の方々、並びに会友、会員及び伊能三郎右衛門家他関係者、総勢二〇〇名近い出席者により行われた。ひきつづいて歓迎懇親会がありいづれも盛大であった。夜の第二部は会場を移し、新橋に近い内幸町ホールにおいて落語家でNHKテレビでおなじみの立川志の輔師匠による落語『大河への道、伊能忠敬物語』があり、1時間半におよぶ熱演で、まさに圧巻でありました。翌22日（日）は、福岡八幡宮など都内の伊能忠敬ゆかりの地史跡めぐりバスツアーがあり源空寺では記念法要の後、一同墓参をしました。この忠敬没後二〇〇年事業は渡辺名誉代表中心に研究会本部やイノベデアの方々等が2年前から鋭意準備を進めてこられたもので、この度、成功裡に無事終えたこと、誠に慶ばしく大変印象に残る2日間の記念行事であった旨報告された。続いて本総会に出席の来賓及び新会員、会員同伴者の紹介を行った。

来賓には国土地理院九州地方測量部斉藤勘一郎長においで頂き、合わせて特別講演をお願いした。紹介後早速講演（1）に入り、斉藤部長さんより「地図ができるまで」国土を描く新技術」と題し、私達を取り巻くいろいろな地図や、宇宙技術でつくられる緯度・経度や、地図のできるまで等を体系的にわかり易く説明があり普段聞けない有意義な講演でした。当研究会菱山剛秀事務局長（元九州地方測量部長）から来賓が国家測量開始一五〇年の節目と伺っており、このたびの斉藤部長さんの講演は大変タイムリーなテーマでありました。午後の部の講演（2）では初参加の中野直毅会員（田川郷土研究会会長）から福岡県田川市での伊能測量について詳細な紹介がありました。3時の休憩前の曾根田馨会員（株カクマル会長）の「全国境界の四方山話」は氏が測量や土地家屋調査用品など扱っている会社の経営者で経済界の第一線で活躍されている方で豊富な体験といろいろな事例をあげてのスピーチに大変感服しました。



平成30年度 伊能忠敬研究会九州支部総会
H30.6.23 福岡市立南市民センターにて

量熊本県資料集をもとに説明され、個人所蔵されているものが多く保存に難点がある、又公的機関による所蔵が少ない等の指摘があった。今年度の総会は午前から開会したため日程も順調にすすみこの後、井上事務局長による会計報告や、会員動向等の支部長報告を行い閉会した。終了後は恒例の懇親会を「梅の花」で開き、19名の参加があり大いに懇親を深めました。今年もまた忠敬先生に感謝の一日でした。

（いしかわ せいいち）

JR佐原駅前ロータリーに

伊能忠敬翁の銅像を建立

今年（二〇一八年）は、伊能忠敬翁没後二〇〇年の節目の年に当たります。これを機に、香取市は、郷土の偉人伊能忠敬翁の偉大な業績を後世に伝え、永く歴史にとどめるため銅像の建立を行いました。

除幕式は平成30年5月20日（日）盛大に挙行されました。

銅像は高さ4.4m（銅像2.3m、台座2.1m）北極星の観測を意識して、北向に建立されています。

制作者

木内禮智氏（香取市出身彫刻家）



伊能測量協力者顕彰会に

参加して（子孫）二

香川県 石原博司

伊能忠敬研究（第85号）を受け取りました。

冊子後半の顕彰大会に参加された皆様の感想文は読み応えがありました。特に石川県の大星氏の「志の輔落語の世界」は、あの夜に聞かせていただいた志の輔師匠の話の完璧に再現しており圧巻でした。

多くの皆様が「戸村さん、ありがとう」と書いてありました。私も同感です。志の輔師匠の落語で最後の一言となった「good job」は戸村さんにも向けられたものであったと思います。

亀岡市 桂 文子

昨日は『伊能忠敬研究』記念事業特集号をお届け頂きましてありがとうございます。

21日からドイツへかけていて、本日も昼頃に帰国したばかりで、まだ内容をつぶさに拝見、拝読はできていないのですが、取り急ぎ、御礼を申し上げます。友人が貸してくれた井上ひさしの『四千万歩の男』もこれから読む予定です。どのように描いてあるか、楽しみにしています。研究会、編集作業の皆様によりしく謝意をお伝えください。ありがとうございます。取り急ぎ御礼まで。

滋賀県 川浪富士夫

拝啓 伊能忠敬没後二〇〇年記念事業「伊能測量協力者顕彰会」、特集号をお送り下さり、又私のメールも載せて頂き有り難うございました。

今、本を読んでいる所です。あの時の感動が、よみがえり、胸が熱くなりました。戸村様、渡辺会長様、他皆様、改めてお礼申し上げます。有り難うございました。今後ともよろしくお願い致します。 敬具

佐賀県 中島 惇

佐賀の方は秋の気配がまだまだの毎日です。

この度は、冊子をお送り頂き、有難うございました。

伊能忠敬顕彰大会の様子と参加者のご意見の内容を読み、再び、お世話頂いた方々のご功労を感じました。有難うございました

85号の誤植：お詫びして訂正します。

53p 1 段目 6 行
(三重県亀山市) ➤ (石川県七尾市)
58p 4 段目 19 行
小林 一 ➤ 小林 一三
最終行 曾根田薫 ➤ 曾根田馨
裏表紙裏面 最下行
03-3465-9752 ➤ 03-3466-9752

新入会員自己紹介

福岡県

白石文紀



今度入会しました福岡の白石文紀（67歳）です。工業高校で土木の教員をしていたのですが、退職後は建設会

社で働いています。

伊能忠敬に最初関心を持ったのは4千万歩の男を読んだからです。山島方位記を見て伊能さんが立った位置を特定してみたいと思ったことや伊能ウォークに参加してハマりました。本来凝り性で、教員をしていた頃は実習に、ログハウス作りを取入れ、卒業制作で生徒と一緒にバス待合所やツリーハウスなど12棟を建て地域に寄贈しました。今は山島方位記を使って観測点を求めることや自作蒲鉾板アリダードによる平板測量で伊能図に挑戦中です。ご指導よろしくお願いします。

誌上総会

今年度は年度当初に実施した伊能忠敬二〇〇年記念事業に地方会員の方に遠方より多数参加していただきました。1年に何度もお集まりいただくのは会員の負担も大きいので、理事会において、総会の議案を審議し、その結果を誌上で報告することで、総会に代えさせていただくことにしました。

なお、予算の収支において、平成29年度に計上していた伊能忠敬没後二〇〇年記念事業に関する事業費の執行が平成30年度にまたがったため、同事業に関する経費については、平成30年7月31日までを平成29年度経費の収支を含めて決算し、8月25日に会計監査を実施しました。

したがって、伊能忠敬没後二〇〇年記念事業の実施内容は、平成29年度事業として報告させていただきます、平成30年度事業報告には、実施した事実のみを再掲しています。

会員各位には、事情をご賢察のうえ、誌上総会とすることをご了承賜りますようお願い申し上げます。

なお、報告内容等に疑問やご不信な点がございましたら事務局にご連絡いただきますようお願いいたします。

平成29年度伊能忠敬研究会事業報告

1. 会員動向（平成29年4月1日～平成30年3月31日）

・入会者…7名 高井正巳、菅原佐知子、小坪隆、勝又洋、井上健、福田仁、足立智彦、
・退会者…14名 浅井京子、井上靖子（逝去）、吉田義昭、原田照男、井田福次郎、野崎信行、芳賀啓、村上昭三、坂本巍、狼勢津子、岡部隆男、中野登、守屋敏子、田上孝

2. 事業等

・総会 郵送による紙上総会とし、会員からの指摘等を踏まえ議案を修正して会報82号で報告した。議案 平成28年度事業報告・予算の収支報告、平成29年度事業計画・予算、役員改選

・伊能忠敬没後二〇〇周年 記念事業 伊能測量協力者顕彰会・懇親会

平成30年4月21日（千代田区学士会館）協力者子孫、来賓、研究会会員・会友、伊能家子孫等顕彰会一八三名、懇親会一七一名参加

来賓 国土地理院長 村上広史、東京地学協会会長 野上道男、日本ウォーキング協会会長 畑浩靖、日本土地家屋調査士連合

会会長 岡田潤一郎、伊能忠敬大河ドラマ化推進協議会会長 木内志郎

記念落語会 平成30年4月21日 19:00～21:00 千代田区内幸町ホール 一四五名参加

都内史跡めぐり・伊能忠敬墓前祭 平成30年4月22日 9:30～13:00 九八名参加。バス2台で芝丸山公園（伊能忠敬測地遺功表）、富岡八幡宮（伊能忠敬銅像）等を巡る

墓前祭（上野源空寺、伊能忠敬墓前で読経、焼香を実施）

記念誌「伊能忠敬 日本列島を測る」A4判フルカラー 前編（126p）・後編（122p）平成30年4月13日 一四〇〇部刊行

会員、関係機関、伊能測量協力者顕彰会、地方自治体等に配布

・理事会 平成29年5月21日（総会資料確認、顕彰会準備等）

・顕彰会準備会 平成30年3月26日 会報発行

81号（64p 6/30発行）、82号（66p 9/30発行）、83号（72p 2/28発行）

・協賛事業 平成29年11月8日～14日、パルテノン多摩 市民ギャラリー、特別展示室他。地図展協議会「地図展 2017 南多摩50年の軌跡」

講演会等への講師派遣

・平成30年2月7日千葉県佐倉市（佐倉市中央公民館）

佐倉市民カレッジ 講演「伊能忠敬の人間像―人生を二度生きた男」鈴木純子

・平成30年3月31日、千葉県柏市よみうりカルチャー柏センター
「千葉の偉人・伊能忠敬没後200年」50歳から日本地図を創った男」星埜由尚

※講演は研究会に要請があり、対応したものに限り記載

・記者発表

平成29年11月1日

東京都中央区立銀座区民館

忠敬没後二〇〇年記念行事の進行について

以上

平成29年度 伊能忠敬研究会収支報告

会計期間：平成29年4月1日～平成30年3月31日（記念事業費は平成30年7月31日）

収入

項目	予算a	決算b	増減b-a	備考
会費(当年度分)	1,000,000	935,000	-65,000	当年度納入(560,000)、H28年度納入(375,000)
会費(過年度分)	105,000	95,000	-10,000	前年度までの未納分(95,000)
会誌売上	30,000	14,500	-15,500	500×29
前年度繰越金	2,039,271	2,039,271	0	予算の前年度繰越金には、当年度の会費395,000を含む
利息		2	2	
誤振込		10,000	10,000	記念事業寄付金の誤振込(10,000)
合計	3,174,271	3,093,773	-80,498	

支出

項目	予算a	決算b	増減b-a	備考
会報作成費	380,000	353,260	-26,740	印刷費(333,260)、編集費(20,000)
会報発送費	100,000	79,704	-20,296	ヤマト便(79,704)
事務所賃料	268,800	268,800	0	22,400/月×12
記念事業費	2,200,000	2,159,831	-40,169	記念事業費補助(800,000)、記念誌作成費(30年度支出：編集費502,400、印刷費643,120、送料等214,311)
通信費	50,000	46,836	-3,164	電話代(36,003)、銀行振込手数料(1,296)、郵便発送費(9,537)
事務費	160,000	56,614	-103,386	紙上総会：資料印刷・返信はがき・郵送代(36,012)、事務室管理費(20,000)、振込用紙印字費用(602)
誤振込		10,000	10,000	記念事業寄付金の誤振込(10,000)
予備費	15,471	0	-15,471	
(翌年度繰越金)				118,728
合計	3,174,271	2,975,045	-199,226	

預金残高

平成30年3月31日時点

項目	預金残高	備考
平成29年度末 預金残高	1,898,559	納入済みの平成30年度会費(420,000円)および平成29年度予算で平成30年度支出の記念事業費(1,359,831円)を含む。
内訳		
ゆうちょ銀行	1,713,720	平成30年度会費420,000円および記念事業費(記念誌作成費：編集費・印刷費)1,330,147円を含む。
みずほ銀行	184,839	記念事業費(記念誌送料等)29,684円を含む。

上記のとおり報告します。

平成30年8月25日

事務局長

菱山 剛秀 

伊能忠敬没後 200 年記念事業費収支報告

収入

項目	予算a	決算b	増減b-a	備考
伊能測量協力者顕彰大会	2,170,000	5,553,328	3,383,328	
イノペディアをつくる会	1,370,000	1,378,472	8,472	
伊能忠敬研究会	800,000	800,000	0	伊能忠敬研究会平成29年度予算
参加費、寄付金	0	3,374,856	3,374,856	寄付者120名(子孫30、団体・会友7、会員83) 振込手数料(減額分)を含む
記念誌	1,400,000	1,359,831	-40,169	
伊能忠敬研究会	1,400,000	1,359,831	-40,169	伊能忠敬研究会平成29年度予算(編集費500,000円、印刷・発送費900,000円)
合計	3,570,000	6,913,159	3,343,159	

支出

項目	予算a	決算b	増減b-a	備考
伊能測量協力者顕彰大会	2,170,000	5,553,328	3,383,328	
顕彰大会		3,238,151	3,238,151	司会等大会運営費、「事績一覧」・「プログラム」等配布物作成、会場費(2部屋)、懇親会費(171名)
記念落語会		805,123	805,123	会場費、出演料等
史跡めぐり・墓前祭		656,904	656,904	貸切バス代(2台)(記念落語会移動(3台)を含む)、弁当代、墓前祭御布施
連絡通信等事務費		853,150	853,150	記者発表(会場費、資料作成費等)、案内状・リーフレット等印刷・発送、その他連絡通信費等事務費
記念誌	1,400,000	1,359,831	-40,169	
編集事務費	500,000	502,400	2,400	編集・調査費(連絡・通信費、消耗品等)、県別地図作成費
印刷・発送費	900,000	857,431	-42,569	A4判、フルカラー、前・後編(248p)、各1,400部印刷 会員(187部)・自治体(885部)送付、正誤表作成等
合計	3,570,000	6,913,159	3,343,159	

※ 伊能測量協力者顕彰大会は、寄付金の額により実施内容を決めたため、予め予算項目は立てていない。

平成29年度 伊能忠敬研究会監査報告

平成29年度収支報告及び伊能忠敬没後200年事業費の収支報告は、入出金記録簿と証拠書類を照合し、確認した結果、適正と認めます。

平成30年8月25日

監事

清水靖夫 (印)

平成30年度伊能忠敬研究会事業計画

1. 会員動向(平成30年4月1日～平成30年9月31日)
 - ・入会者…9名 中野直毅、前嶋とし子、佐野明子、渡邊亜美、占部邦昭、加茂洋文、廣田晋也、白石文紀、赤堀浩一
 - ・名誉会員 立川志の輔
 - ・退会者…2名 前嶋初枝(逝去)、佐藤正弘
2. 事業等
 - ・総会 総会議案を会報86号で確認いただく誌上総会とする。
 - ・理事会
 - 第1回 平成30年10月(平成30年度総会資料確認)
 - 第2回 平成31年1月(予定)
 - ・会報発行
 - 85号(60p 8/20発行)、「伊能測量協力者顕彰会」特集号
 - 86号(60p 10/30発行)、
 - 87号(60p 2月発行)
 - ・伊能忠敬没後二〇〇年記念事業(平成29年度事業として報告)
 - 伊能測量協力者顕彰会
 - 平成30年4月21日
 - 千代田区学士会館ほか
 - 記念誌刊行
 - 「伊能忠敬 日本列島を測る」前編・後編 平成30年4月13日

・後援・協賛事業

- 地図展協議会、「地図展2018 地図に映る明治の日本」への協力
- 平成30年11月1日～7日 東京都千代田区民ホール
- 講演会等への講師派遣
 - ・平成30年5月27日(日) 東京都八王子市生涯学習センター クリエイトホール
 - 講演「古地図の魅力 伊能図から見た伊能忠敬の功績」 菱山剛秀
 - ・平成30年7月11日(水) 埼玉県新座市立中央公民館
 - 講演「伊能忠敬50歳から日本地図 日本地図を作った男」 鈴木純子
 - 報道・番組等への対応
 - ・平成30年6月4日(月) 朝日新聞朝刊 文化の扉
 - 「伊能図出回っていた?」
 - ・平成30年6月6日(水) NHK歴史秘話ヒストリア 伊能忠敬「あなたの先祖も手伝った!」
 - 伊能忠敬 究極の日本地図
 - ・平成30年8月16日 毎日新聞東京夕刊
 - 没後200年・伊能忠敬を歩く「宮城・松島 奥州へ妻を伴い観光旅行」
 - ※講演、報道・番組は研究会に要請があり、平成30年9月30日まで対応したものに限り記載

以上

平成30年度 伊能忠敬研究会予算

収入

項目	前年度予算a	当年度予算b	増減b-a	備考
会費(当年度)	1,000,000	970,000	-30,000	一般会員190×5,000、特別会員1×20,000
会費(前年度未納分)	105,000	110,000	5,000	H28年度(6)、平成29年度(16)
会誌等売上	30,000	130,000	100,000	当年度予算には記念誌(100,000)売上を含む
前年度繰越金	2,039,271	118,728	-1,920,543	
合計	3,174,271	1,328,728	-1,845,543	

支出

項目	前年度予算a	当年度予算b	増減b-a	備考
会報作成費	380,000	380,000	0	印刷費、編集費(60p×400部×3回)
会報発送費	100,000	200,000	100,000	3回分(送料値上げによる増額)
事務所賃料	268,800	268,800	0	22,400×12月
記念事業費	2,200,000	0	-2,200,000	
通信費	50,000	60,000	10,000	電話代、郵送料、銀行振込手数料等
事務費	160,000	150,000	-10,000	資料印刷、交通費、消耗品等
予備費	15,471	269,928	254,457	
合計	3,174,271	1,328,728	-1,845,543	

『伊能忠敬研究』投稿要領

①原稿の長さ

論文、報告、紹介、などは、本文・写真・図などを含めて一件につき刷り上がり八頁まで、各地のニュース・お知らせなどは刷り上がり一頁以内を原則とします。

*刷り上がり一頁に入る文字数は約2000字(704字×3段または480字×4段)です。長い原稿の場合は連載として分割していただくこともあります。

②原稿のかたち

・本文(テキスト) 原則として、マイクロソフト社のワードなど一般的なワープロソフトで作成された電子ファイルとします。

・写真 一般的にJPEG形式またはTIFFまたはフォトショップのPSD形式でフォーマットされた電子ファイルとし、印刷サイズで350dpi程度の解像度のよい鮮明なものを用意してください。

*印刷サイズが100mm×75mmで350dpiのカラー写真の場合、1MB前後のファイルになります。通常のデジタルカメラによって5Mモード以上で撮影された画像ファイルで問題ありませんが、カメラ付き携帯電話で撮影された写真は無理な場合があります。

わからない場合はL判(127mm×89mm)程度にプリントアウトした鮮明な写真でも結構です。

・図 写真に準じます。原図をコピーする場合は、なるべくスキヤナで撮った電子ファイル(JPEG形式またはTIFF形式)にしてください。

③原稿の送り方

左記まで電子メール添付か、CDなどのメディアにコピーしたものを郵送してください。その際、挿入する写真・図がある場合はその位置、およびそのサイズを本文中に編集者がわかる形で記入しておくか、概略を記入した割付用紙を添付してください。また、題名、著者連絡先、原稿区分、刷り見込みページ数などを記入したメモ、または原稿整理カードも同時に送付してください。(詳しくは本誌六七号および六八号を参照)

送り先

・電子メール添付の場合 kaiho@inoh-ken.org

・郵送の場合 〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2階

伊能忠敬研究会「伊能忠敬研究」編集部

④注意事項

・編集途中での大幅な追加修正はお受けできません。完成原稿として投稿してください。

・図や写真の引用について、必要な場合は投稿する前に執筆者が責任を持って許可を取っておってください。

・引用した文献等については本文末尾にリストや注記等で出典を明らかにしてください。

・原稿内容を編集委員会で検討し、不明な点や内容的に不備な点があった場合には執筆者に連絡し、修正または掲載を見送る場合があります。

・受理した原稿は原則として執筆者にお返しいたしませんので、必ずコピーをとっておいてください。

次号(第87号)は2019年2月発行

原稿の切は12月30日の予定です。

皆様からの投稿をお待ちしています！

伊能忠敬研究会 御案内

一、本会は伊能忠敬に関心をお持ちの方はどなたでも入会できます。

二、つぎのような活動を行っております。

- ①会報の発行 研究成果・会員活動情報など 原則として年三回発行
- ②例会・見学会の開催
- ③忠敬関連イベントの主催または共催
- ④その他付帯する事業

三、入会方法等 入会を希望される方は郵便振替で住所、氏名、電話番号、通信欄に専門、趣味、入会の動機、御意見などを書き添えて、年会費五千円を左記にお送り下さい。会計年度は、四月から翌年三月ですが、年度途中より御入会の場合は、当該年度の会報のバックナンバーをお送りします。

四、伊能忠敬研究会事務局所在地

〒153-0042 東京都目黒区青葉台4-9-6 日本地図センター2F

電話・FAX 03-3466-9752

事務局メール mail@inoh-ken.org (留守の場合は録音テープに吹込んでください。)

郵便振替口座 00150-60728610

ホームページ <http://www.inoh-ken.org/>

伊能忠敬研究会関係ホームページ

○伊能忠敬e資料館「Inopedia(イノペディア)」伊能忠敬と伊能図の大事典
<http://www.inopedia.tokyo/>

○「伊能忠敬研究会・資料室」現存する伊能図の所在一覧、アメリカ伊能大図など地図および史料
<http://members.jcom.home.ne.jp/t-sakano/>

○「伊能忠敬図書館」忠敬関係の文献、画像資料
<http://www.ttrm.or.jp/~koko>

編集後記 ◇今秋はいつもになく自然災害が多かった。豪雨・土砂崩れ・地震、おまけにブラックアウトまで。首都圏だつたらと思うとぞっとする。日本の技術力を過信し「ポーッと」してはいられない。◇本会主催の伊能忠敬没後200年記念事業が4月末、盛大に行われた。前号85号はその特集号となり、H氏が孤軍奮闘され8月に発行された。お手伝いもせずには自分だが、何かを成した気がしたのは不思議だ。気付くと86号原稿の締め切り日が近づいていた。「ポーッと生きてるんじゃねえよ!」チコちゃんの叱り声が聞こえてきそう。◇前号からの送り原稿があり何とかなると高を括っていた。しかし、原稿は集まらない。当会も高齢化のためか寄稿される方が少なくなってきた。一方、編集力が問われる原稿もありこれも悩ましい。専門的な内容を含む原稿は一個人では対応できないこともある。当然、お知恵拝借となる。寄稿された原稿はみな大切に。編集作業をスムーズにするためにも、専門分野を含む原稿は予め評価を受けるシステムがあるとありがたい。(S・M)